

表紙, 目次, 雑纂, 通信, 雑報, 漫録

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38410

明治四十三年五月十八日發行

十全會雜誌

第五十八號

全澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第五十八號目次

●故大田美農野略傳及肖像

○原著及實驗

●明治四十一年、四十二年度間に於けるハイモル氏
竇ユムビーム患者の統計的研究

岡 忍

●上顎竇蓄膿症ノ根治手術 附、上顎竇内ニ逆生セ
ル齒牙一例

濱地 藤太郎

●本校解剖學教室屍体統計

中野 鑄太郎

○雜 纂

●藥品検査便覽

J. Y 生

●新生藥摘錄 (承前)

謙 中 生

●「アースターセ」類効力比較試驗成績

多野常三郎
恩田重信

○通 信

●生沼氏通信 ●田上氏通信 ●永井氏通信 ●東京在學同窓會通信 ●梅岡氏通
信 ●宮村氏通信 ●長井氏通信 ●萩野氏通信 ●丹羽氏通信

○校內雜報

●弓術部射初式 ●柔道部記事 ●剣道部大會 ●四年級々會記事

○内地雜報

●ドクトル問題「ドクトル」に於ける法 ●本會員の第三回日本醫學會に於け
る演題

○人 事

●高山教授他三十余名

○漫 錄

●醫術開業

佐々木 達

○會 告

●故小川教授銅像建設醜金芳名 ●會費納付調書

○廣 告

●數 件

藥 劑

藥 品 驗 查 便 覽

J. Y 生

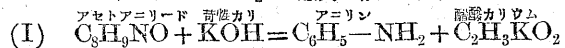
アセトアニリド アンチヘブリン

Acetanilidnm. Antifebrinum

$C_8H_9NO=135,13$

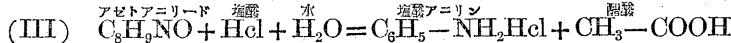
熔融點 $113^{\circ}-114^{\circ}$ | 注意シテ貯フベシ
一回ノ極量 0,5g 一日ノ極量 1,5g

實性反應 本品ニ「カリ」澆液ヲ加ヘテ熱スレバ芳香性ノ蒸氣 (Anilin)ヲ發ス (I). 之ニ「クロフォルム」二三滴ヲ點加シタル後更ニ熱スルトキ
ハ「イソニトリール」ノ惡臭ヲ放ツ (II).



本品 0,2g ナ鹽酸 2ccm ニ溶解シ (III) 一分時間煮沸シタル後石炭酸溶液 4ccm ナ和シ「クロール」石炭溶液ヲ加フルニ汚紫藍色ヲ

呈シ之ヲ「アムモニア水」ヲ以テ過飽スルニ藍色ヲ呈ス之レ「インドフェノール」($N \left\langle \begin{smallmatrix} C_6H_4, OH \\ C_6H_4, OH \end{smallmatrix} \right\rangle$)ヲ構成スルニ由ルナリ



試 験

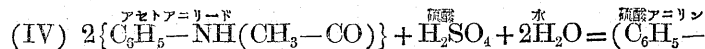
化 學 方 程 式

夾 雜 物

本品ノ冷飽和水溶液ハ稀薄ノ過「ク

ロール鐵溶液ニ由テ變化ス可カラズ

本品ハ 0,1g 硫酸 1ccm ニ染色セズ



赤色ヲ呈スレバ「アンナピリン」雜

黑色ヲ呈スレバ「アニリン」鹽

他ノ有機物

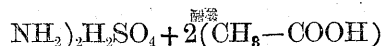
テ溶解スベシ (IV)

本品 0.2g ナ硝酸 2ccm ニ和シテ振盪

スルニ染色スベカラズ

本品 0.1g ナ燃化スルニ秤定シ得ベキ

固性物ヲ残留スベカラズ



黄色ナ呈スレバ「フェナセチン」

無機物

粗 製 木 醋

Acetum prolignosum crudum

百分中六分以上ノ純醋酸 (C₂H₄O₂ = 60.04) ナ含有ス

試 験

本品一容量ニ水一容量ヲ加ヘテ稀釋

濾シ過シテ得タル液ハ黄色血濁鹽溶

液ニ由テ淡藍色ヲ呈スルニ過グ可カ

ラズ (I) 又硝酸バリウム溶液 (II)

並ニ硝酸銀溶液 (III) ナ加フルニ蛋

白濁ヲ起スニ止ルベシ

硫化水素ニ由テ變化ス可カラズ

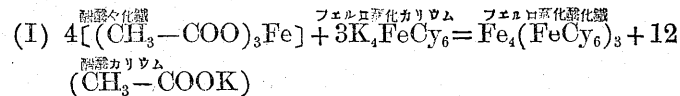
(IV)

本品 10ccm ニ定規カリ液 10ccm ナ

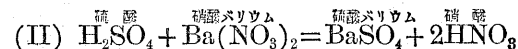
加ヘタルモノハ「アルカリ性」ノ反應

ヲ徴ス可カラズ (V)

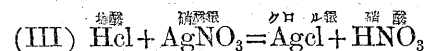
化 學 方 程 式



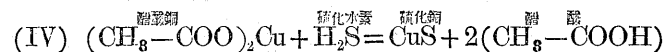
醋酸々化鐵ノ痕跡



硫酸ノ痕跡



塩酸ノ痕跡



暗色ヲ呈スレバ銅. 鉛白濁スレバ亞鉛



醋 酸

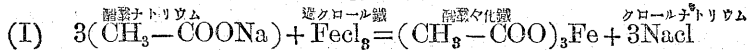
Acidum aceticum

百分中三十六分ノ純醋酸 (C₂H₄O₂ = 60,04) ナ含有ス

比 重 1,048

實性反應 本品一容量ニ水六容量ヲ加ヘテ稀釋シタルモノハ「ナトロ」滴液ヲ以テ中和シタル後 (醋酸ナトリウム CH₃-COONa ナ生ズ) 過

クロール鐵溶液ニ由テ赤色ヲ呈ス (I)



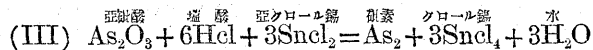
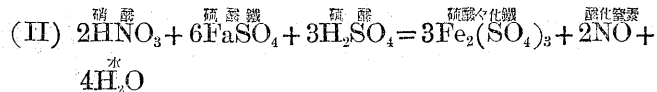
試 驗

本品ハ「ナトロ」滴液ヲ以テ中和スルニ焦臭ヲ放ツ可カラズ又同容量ノ硫酸ヲ混和スルニ染色セズ冷後之ニ半容量ノ硫酸鐵溶液ヲ加ヘテ二液層トナスニ其接界ニ於テ類褐色ノ輪帶ヲ生ズ可カラズ (II)

本品 1ccm ニ亞クロール錫溶液 3ccm ナ和スルニ一時間以内ニ暗色ヲ呈ス可カラズ (III)

本品一容量ニ水六容量ヲ加ヘテ稀釋シタルモノハ硝酸バリウム溶液、硝酸銀溶液、アムモニア水、硫化水素水ニ由テ變化ス可カラズ

化 學 方 程 式



夾 雜 物

焦臭性物質
他ノ有機物
硝酸

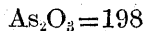
砒化物

硫酸、鹽酸、銅(藍色)屬金重

本品 15ccm ニ過マンガン酸カリウ
ム溶液 1ccm ナ和スルニ十分時間以
内ニ其赤工色ヲ消失ス可カラズ。

亞硫酸・亞砷酸・有機質

亞 砷 酸
Acidum arsenicosum

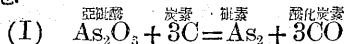


最モ注意シテ貯フ可シ

一回ノ極量 0,005g 一日ノ極量 0,015g

實性反應

本品ヲ注意シテ木炭上ニ熱スルトキハ金屬性砷素ニ還元シ其砷素蒸氣ハ蒜臭ヲ放ツ可シ (I)



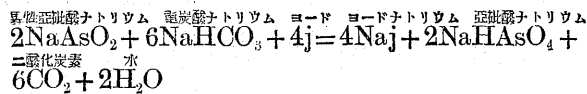
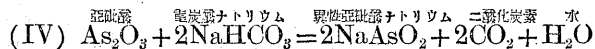
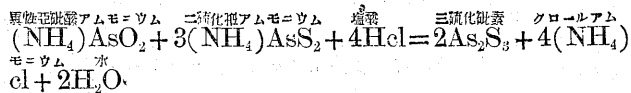
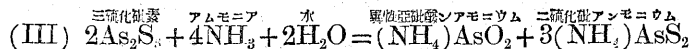
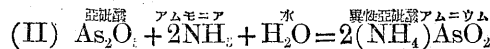
試 驗

本品一分ハ十分ノアムモニア水ニ澄
明ニ溶解スヘシ (II)

此溶液ニ十分ノ水ヲ加ヘ之ニ鹽酸ヲ
過飽スルニ黃色ヲ呈ス可カラズ
(III)

0,5gノ亞砷酸ヲ重炭酸ナトリウム
13gト共ニ 20ccmノ沸湯中ニ溶解シ
冷後水ヲ加ヘテ 100ccmトナシ其 10
ccmヲ取り之ニ十分定規ヨード溶液
ヲ加フルニ脱色スベシ (IV)

化 學 方 程 式



夾 雜 物

土類、硫酸石灰、硫酸バリウム等

硫化砷素

安 息 香 酸

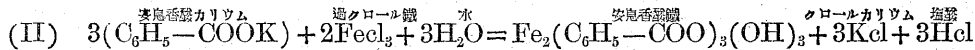
Acidum benzoicum

C₇H₆O₂=122,06

熔 融 點 約120°

實 性 反 應

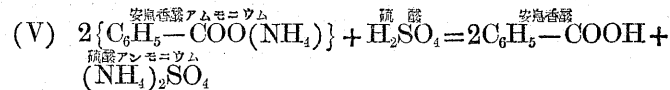
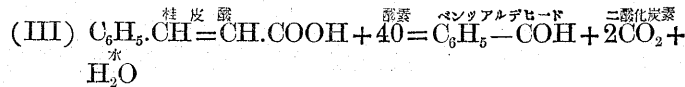
本品 0,2g =水 20ccm 及ビ定規カリ液 1ccm ナ注加シ時々振盪シツ、十五分時間放置シ (I) 後濾過シ濾液ニ一滴ノ過クロール鐵溶液ヲ加フレバ類黃色ノ沈澱ヲ生ズ (II) 尿製及ビ人工製安息香酸ノ「カリウム鹽」過クロール鐵溶液ニ由テ類赤黃色ノ沈澱ヲ生ズ又樹脂ヨリ昇華セル安息香酸ハ「フェノール様」物質ヲ含有シ「カリ濾液」ニ溶解スレトモ安息香酸鐵ト共ニ沈降ス



試 驗

本品及ビ過マンガン酸カリウム各一分ヲ十分ノ水ト共ニ試験管中ニ容レ寬ク栓塞シテ二時間微温ヲ與ヘ冷後之ヲ開クニ揮發苦扁桃油ニ類スル臭ヲ放ツ可カラズ (III)
0,1g ノ安息香酸ニ 1ccm ノ「アムモニア」水ヲ加フレバ黃色乃至類褐色ノ漚濁セル溶液ヲ得 (IV)
此混液ニ稀硫酸 2ccm ナ加フレバ安息香酸ヲ再ビ析出ス可シ (V)

化 學 方 程 式



夾 雜 物

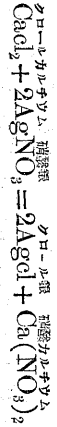
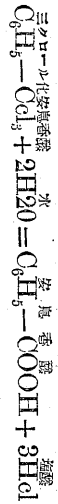
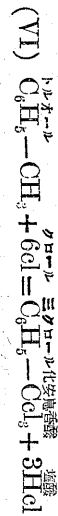
桂皮酸 (スマトラ安息香ヨリ昇華シ製シタルモノ)

尿製及人工製安息香酸 (澄明ニ溶解ス)

脱色セザレバ尿製並ニ人工製安息香酸

之ニ過マンガン酸カリウム溶液
5ccmヲ加ヘ四時間放置スルニ殆ソ
ト全ク脱色スベシ

本品 0.2gニ尿酸カルチウム及ビ少許
ノ水ヲ混シ乾溜シ煇灼シ其殘留物ヲ
硝酸ニ溶解シ水ヲ加ヘテ Iocem トナ
シタルモノハ硝酸銀溶液ニ由テ蛋白
石濁ヲ起スニ過ク可カラズ



クロール安息香酸 (トルオールヨリ
製セルモノ)

新生藥摘錄

(承前)

謙 中 生

●白頭翁「オキナグサ」

Anemone cernua Thunb. 毛茛科 Ranunculaceae
本邦ニ産シ高サ五寸乃至一尺ニ至ル草本植物ニシテ四五月頃花ヲ開ク根基
Rhizom ハ苦味藥 Amarin トシテ用フ。

●蕃荔枝「バンレイシ」

Anona squamosa L. 蕃荔枝科 Annonaceae
西印度ニ産シ熱帯地方ニ於テハ廣ク培養ス本植物ノ葉ハ發汗藥 Schweiss-
mittel トナシ又其皮部ハ峻下劑 drastische Purgmittel ニ用フ。

●バシクルモン

Apoeynum venetium L. 夾竹桃科 Apoeynaceae

伊太利ノ北部ヨリ支那ニ至ル地方ニ産シ本植物ノ新鮮ナル嫩芽中ニハ無晶
形ノ物質ナル Apoeyntein ヲ含有ス此物質ハ「ヤギタリス」配糖體ニ類似
スル作用アリト。

●沈 香

Aquilaria Agallocha Roxb. 瑞香科 Thymelaeaceae
印度ニ産スル巨大ナル喬木ニシテ「シムメル」會社ニ於テ本植物ノ木部ヲ蒸
餾シ〇・一七%ノ揮發油(其主成分ハ Eton ナリ)ヲ得タリト云フ。

●牛 蒡「ゴハツ」

Aradium Lappa L. 菊科 Compositae
高サ四・五尺ニ達スル草本植物ニシテ本根即チ Radix Barclanae (乾燥ス
ル)ノ原量ノ五分ニ減ス)ノ粘液、砂糖、鞣酸、苦味質、Inulin 及痕跡ノ揮
發油ヲ含ミ腺病藥 Antiseorbuticum ニ供シ、葉ハ外用ニ莖布トナス又種

子ハ十五%ノ脂肪油ヲ含有シ亞米利加ニ於テハ乾癬 Psoriasis ニ實用スト

● アザミゲシ

Argemone mexicana L. 罌粟科 Papaveraceae

西印度及「メキシコ」ニ産シ又諸國ニ培養ス高サ二、三尺ニ至ル草本ニシテ葉ハ上面ニ白紋アリ花ハ黄色ナリ、「メキシコ」ニ於テハ本植物ヨリ得タル乳液 Milchsafte ナ皮膚病ニ用ヒ又其新鮮ナル草本ハ發汗藥 Diaphoretikum トナシ其他種子ヨリ得タル脂肪油ハ瀉下藥 Purganz ニ用フ、

● 波羅蜜樹 「ハラミツ」

Artocarpus integrifolia Forst. 桑科 Moraceae

東印度ニ産シ又熱帶地方ニ培養ス本植物ノ乳液中ニハ Artocarpin, Artocarp-Papayotin, Kautschuk, 樹脂等ヲ含ム而シテ果肉ハ「ブラシル」ニ於テハ咳嗽劑 Hustenmittel トナシ又尿白尿 Albuminurie ニ用フ (未完)

● 「デアスターゼ」類効力比較試驗成績

陸軍三等藥劑正 波多野常三郎

陸軍三等藥劑正 恩田重信

「デアスターゼ」類効力比較試驗ノ目的ハ汎ク販賣シタル「デアスターゼ」類ノ澱粉ニ對スル糖化作用ニ就キ効力ノ優劣ヲ比較判定スルニアリ試驗ニ供シタル品種ハ左ノ十一種トス

- 一 タカデアスターゼ
- 二 ギグスチン
- 三 日本デアスターリン

(雜 藥)

四 柏木デアスターゼ

五 マルシアスターゼ

六 小林デアスターゼ

七 日本藥局方デアスターゼ

八 日本藥局方デアスターゼ

九 マルツデアスターゼ

十 糖化素

十一 ギグスチン

佐藤製藥所製造

製造者不明

澱粉容化力試驗方法

第一法 日本藥局方規定ノ方法ニモ據ルノニシテ則チ百度ノ温ニ於テ乾燥シタル馬鈴薯澱粉六「グラム」ニ水三十立方「センチメートル」ヲ注加シ能ク振盪シテ平等ニ水ト混和セシメ爾後沸騰蒸餾水七十立方「センチメートル」ヲ注加シ時々振盪シツ、三十分時重盪照ニ浸シ加熱シテ平等ノ糊液トナシ五十度ニ冷却セシメタル後檢體〇、一「グラム」ヲ加ヘテ溶解セシメ五十度ノ温ヲ保ツ所ノ重湯煎中ニ浸シ時々動搖シツ、六時間放置シテ得タル溶液十立方「センチメートル」(澱粉〇、六「グラム」ニ相當ス)ハ五十立方「センチメートル」ノ「フェリソング」溶液ヲ脱色セザル可カラザルモノニシテ即チ日本藥局方ハ六時間以内ニ三十七倍以上ノ「マルトーゼ」ヲ生ズルヲ以テ藥用ニ供スルニ足レリトセリ故ニ日本藥局方規定ノ「デアスターゼ」ハ甚ダ低度ノ糖化力ヲ有スルモノトス

第二法 馬鈴薯澱粉三「グラム」ヲ糊化シ百五十立方「センチメートル」トナシ之レニ檢體〇、〇三「グラム」ヲ投加シ四十度ノ温ニ於テ重湯煎中ニ浸シテ時々振盪シツ、放置シ十分時間ヲ經ル毎ニ粥液四立方「センチメートル」ヲ試験管ニ取り沃度溶液一立方「センチメートル」ヲ加ヘ澱粉ノ反應ヲ呈セ

ザルニ至ル迄ノ時間ヲ測定シ溶化力ノ優劣ヲ定ム右ノ分量比例ニ由テ試験スルニ一時間以内ニ澱粉ノ反應ヲ認メザルニ至ルトキハ該「デアスターゼ」ノ溶化力ハ百倍トス右ノ試験ニ依リ其力百倍以上ト認ムルトキハ檢体〇、〇三「グラム」ヨリ少量ヲ加ヘ試験シ其ノ力ヲ定ム

各種檢体ノ成蹟

(一) 「タカヂヤアスターゼ」類黃白色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ニハ微ニ白色ノ沈渣ヲ殘シ溶解シ淡褐色半透明ノ液トナリ之レニ沃度液ヲ加フルモ變化ナシ第一試驗方法ニ從ヘハ容易ニ「フェリンク」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徵シ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ澱粉ヲ四十五分間ニテ全ク溶化シ百倍以上ノ溶化力アルヲ認メタルヲ以テ更ニ〇、〇一五「グラム」ヲ以テ三「グラム」ノ澱粉溶化ニ要スル時間ヲ測定スルニ一時二十分ヲ要シ約二百倍ノ澱粉ヲ溶化スルノ効力アルモノトス

(二) 「ヂグスチン」淡褐色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ニハ殆ド全ク溶解シ褐色半透明ノ液トナリ之レニ沃度液ヲ加フルモ變化ナク第一試驗方法ニ從ガイ容易ニ「フェリンク」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徵シ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ澱粉ヲ四十分間ニテ溶化シ百倍以上ノ溶化力アルヲ以テ更ニ〇、〇一五「グラム」ヲ以テ三「グラム」ノ澱粉溶化ニ要スル時間ヲ測定スルニ一時十分ヲ要シ約二百倍ノ澱粉ヲ溶化スルノ効力アルモノトス

(三) 日本「ヂヤスターゼ」淡褐色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ニハ殆ド全ク溶解シ褐色半透明ノ液トナリ之レニ沃度液ヲ加フルモ變化ナク第一試驗法ニ從ヘハ「フェリンク」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徵シ第二試驗法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ澱粉ヲ四十分間ニテ全ク溶化シ百倍以上ノ溶化力アルモノト認メタルヲ以テ更ニ〇、〇一五「グラム」ヲ以テ三「グラム」ノ澱粉溶化ニ要スル時間ヲ測定スルニ一時間ヲ要シ

優ニ二百倍ノ澱粉ヲ溶化スルノ効力アルモノトス

(四) 柏木「ヂヤスターゼ」類黃白色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ニハ微ニ白色ノ沈渣ヲ殘シ溶解シ淡褐色半透明ノ液トナリ之レニ沃度液ヲ加フルモ變化ナク第一試驗方法ニ從ヘハ「フェリスグ」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍ヲ徵シ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ノ澱粉ヲ四十分間ニテ全ク溶化シ百倍以上ノ溶化力アルヲ認メタルヲ以テ更ニ〇、〇一五「グラム」ヲ以テ三「グラム」ノ澱粉溶化ニ要スル時間ヲ測定スルニ一時二十分ヲ要シ約二百倍ノ澱粉ヲ溶化モル効力アルモノトス

(五) 「マルヂヤアスターゼ」淡黃白色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量白色ノ殘渣ヲ折出シ之レニ沃度液ヲ加フレハ藍赤色ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヘハ「フェリンク」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徵シ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ノ澱粉ヲ溶化スルニ五時間ヲ要シ其効力ハ三十七倍以上百倍以下ニアルモノトス

(六) 小林「ヂヤスターゼ」淡黃白色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量ノ白色殘渣ヲ折出シ之レニ沃度液ヲ加フレハ藍色ノ反應ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヘハ「フェリンク」溶液ヲ脱色セス第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ澱粉ヲ溶化スルニ八時間ヲ經過スルモ能ハス故ニ本品ハ日本藥局方不適ノモノトス

(七) 日本藥局方「ヂヤスターゼ」佐藤製造淡褐色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量ノ白色殘渣ヲ折出シ之ニ沃度液ヲ加フレハ淡赤色ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヒハ「フェリンク」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徵シ等ニ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ澱粉ヲ溶化スルニ七時十分ヲ要シ其ノ効力ハ三十七倍以上百倍以下ニアルモノトス

(八) 日本藥局方「ヂヤスターゼ」(製造者不明)淡褐色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量ノ白色殘渣ヲ折出シ之レニ沃度液ヲ加フレハ

藍色ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヘハ「フェリング」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徵シ第二試驗方法ニ從ヒ本品、〇〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ濃粉ヲ溶化スルニ七時四十分ヲ要シ其ノ効力ハ三十七倍以上百倍以上ニア
ルモノトス

(九) 「マルツアスターセ」淡黃白色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量ノ白色殘渣ヲ折出シ之レニ沃度液ヲ加フレハ淡赤色ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヘハ「フェリング」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徵シ第二試驗方法ニ從ヒ本品、〇〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ濃粉ヲ溶化スルニ六時十分間ヲ要シ其効力ハ三十七倍以上百倍以上ニア
ルモノトス

(十) 糖化淡褐色ノ粉末ニシテ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量ノ白色殘渣ヲ折出シ之レニ沃度液ヲ加フレハ藍色ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヘハ「フェリング」溶液ヲ脱色セス第二試驗方法ニ從ヒ本品、〇〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ濃粉ヲ溶化スルハ八時間ヲ經過スルモ能ハス故ニ本品日本藥局方不適ノモノトス

(十一) 「デアスベアターセ」淡褐色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量ノ白色殘渣ヲ折出シ之レニ沃度液ヲ加フレハ藍色ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヘハ「フェリング」溶液ヲ脱色セズ第二試驗方法ニ從ヒ本品、〇〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ濃粉ヲ溶化スルニ八時間ヲ經過スルモ能ハス故ニ本品日本藥局方不適ノモノトス

「デアスターセ」類糖化力試驗
検査ニ供シタル「デアスターセ」類品質ノ概要ハ前記ノ試験ニ於テ已ニ明ナルモ此ニハ就中品質優等ノモノノ四種ヲ選ヒ濃粉糖化作用ノ優劣ヲ比較調査セリ
試験ノ方法ハ檢体〇、〇一「グラム」ヲ四十度ノ温ニ於テ一時間「グラム」ノ可性溶濃粉糊ニ作用セシメタル後此ニ生成セル「マルトール」ノ量ヲ「マイン」氏法ニ依リテ檢査シ檢禮ノ可溶性濃粉ヨリ生成セル「マルトール」ノ

百分率ヲ以テ其ノ糖化力ヲ示スニ左ノ如シ

- 柏木デアスターセ 五二、二二
- チゲスチン 四六、五〇
- 日本デアスターン 六五、四四
- タカデアスターセ 三八、五六

蛋白溶解力試驗

「ゲグスチン」ハ蛋白質及膠質等ニ作用シ之ヲ消化スルノ能力ヲ有スト稱スルヲ以テ「ペプシン」「パンクレアチン」「パペイン」ト比較試験ヲ爲セリ試驗ノ方法ハ第三版日本藥局方所載ノ方法ニ據リ檢體〇、一「グラム」ヲ水百立方「センチメートル」及鹽酸〇、五立方「センチメートル」ノ混液ニ溶解シ之レニ鶏卵白ノ十「グラム」ヲ加ヘ四十五度ニ於テ屢振盪スルニ二時間以內ニ殆ド全ク其ノ卵白ヲ溶解スルモノハ獨リ含糖「ペプシン」ノミニシテ其ノ他ハ之ヲ溶解スルモ其量僅微ニ過キザルモノト認ム

牛乳蛋白質消化力試驗

「ゲグスチン」ノ牛乳蛋白質消化力ヲ試驗スルカ爲メ本品、一「グラム」ヲ取り微温湯十立方「センチメートル」ヲ加ヘ之ヲ溶解セシメ之ニ豫メ蛋白質ヲ定量シタル殺菌牛乳十「グラム」ヲ注加シ二時間三十八度ノ温ニ放置シタル後直ニ煮沸シ消化作用ヲ殺菌セシメ冷後硫酸亞鉛ノ濃厚液ヲ加ヘ此ニ折出スル末消化蛋白質ヲ「キールダール氏」法ニ據リ定量シ先キニ使用シタル牛乳中ニ含有スル蛋白質ノ全量ヨリ差引キ本品方何倍量ノ牛乳蛋白質消化スルヤヲ算出シタルニ五五、五倍ヲ消化スルヲ證明セリ

白阿膠液體化試驗

膠質液體化力ヲ試驗スル爲メ「ゲグスチン」(含糖)「ペプシン」「パンクレアチン」「パペイン」ヲ取り其ノ能力ヲ比較セリ
試験ノ方法ハ白阿膠十五ヲ百ccノ熱湯ニ溶解シ冷却シテ四十度トナシ之ニ檢體〇、一「グラム」ヲ加ヘ振盪シツ、放置シ白阿膠ヲ完全ニ液體化セシムル

(通信)

ニ要シタル時間ヲ測定スルニアリ其ノ成績ヲ表示スルハ左ノ如シ

- パイリン 一時間
- ナゲスチン 一時十分間
- 含糖ペブシン 八時間ニテ尙消化セズ
- パンクレアチン 同上
- 以上拔萃

* * * * *

通信

●生沼曹六氏通信

(松原教授宛)

生沼曹六氏銚牛と號し明治三十一年本校醫學部を卒へ直ちに東京痘苗製造所に入りて本校の前生理及細菌衛生學教授野田忠廣氏の下に細菌學を修め後ち東京醫科大學生理學教室に轉じて大澤謙二博士の助手となり専ら生理學を研究し尙ほ東京體育會の講師となり且つ東京慈惠醫學專門學校の生理學教授を兼擔し令聞噴々たり終に去四十一年夏慈惠醫學校より獨乙留學を命ぜられ本校卒業生田上清貞氏(眼科私費留學)と共にウユルツアルヒ大學にありしが此頃ライプチツロ大學に轉學せられたり致々研究に熱中して業績多く頭腦明晰にして才能に富み實に前途多望の少壯研究者あり余輩は切に全氏の健康と清福とを祈りて止まざるふり尙ほ全慈惠醫學校にては生沼氏の歸朝後には又本校三十一

五二

年卒業生にして目下全校の解剖學教授たる森田齊次氏が獨逸留學の途に上らるゝ豫定なりといふ吾校の名譽と慈惠醫學校の活動亦盛からずや鐵腸兄再び十全會の雜誌部に入りて大に雜報通信欄を擴張せんとの通信一寸考へて變事だと思ふたが復考へて見るに十全會雜誌は決して純學問的雜誌でない十全會と云ふ金澤醫學界ニ關係あるものに團體の機關雜誌である以上は雜報通信欄の擴張は寧ろ其意を得た事と云はればならぬ乃ち大に奮發して十年以來捨てゝ顧みざりし筆硯を洗ひ(ふど)と云へば何だか文章家らしいけれど實はソナナ殻でふく書けぬまゝに無沙汰勝とあつてゐるのである)例に依て獨逸旅行の案内記でも書かうかと思つたけれども古くは鈴木先生近くは佐々木。飯森諸先生の詳細ある通信(予は主として十全會所載の記事を參考として旅行の準備を調べた)があつて今更蛇足を添へる必要もふいから當地にて見聞した事或は平常考へてゐる私見或は讀み書物の中へ記號を附けて置た所などを暇々に書き送る事にしよう

一、顯微鏡的永久標品の價值

予は常に顯微鏡的永久標本の製作法に考へて恰も是れ地氈面に現はれたる古代の遺跡の如きものふりと云ふてゐる故奈何と云ふに先つ生活或は死滅組織を「ミユルレル」氏液さか或は其他種々ある所謂固定液なるものの中に漬ける恐らく鹽類によりて蛋白質を沈澱せしむる目的であらう扱て數日を過ぎて硬化と云ふ事をする漸々濃度の高きアルコールに漬けて行くのた水分を吸ひ取つて組織をこわばらせるのである其れが濟むと或はエーテルに溶したるツエロイダレを浸み込ませたり或は榕かしたるパラフィンを浸み込ませたりして之れを薄片に切りてパラフィンに再び之れを溶し出し種々ある染色を施すこと云ふが大體の方法である斯の如き強硬手段を敢てして生活時の狀態を如何程迄保存し得たるかは何人も斷言し得ざる所であらう何ぞ其手段の火山の噴出する砂石至乃熔岩が生物市街を埋め去り他日再び地

にふどによりて其の断面に埋設物を現出するに相似たらずやボムベいの發掘によりて當時の状態を知り得たる所は頗る多かるべしと雖も發掘せるボムベいを以て全然當時のボムベいなりと云ふものあらば誰か其愚を喘はざらんやだ然も世上往々にして此弊に陥るものが多しメチユニコフ氏樂天的宇宙觀遺稿。(Elias Metschnikoff, Beiträge zu einer optimistischen Weltanschauung, 1908.)の中に自己の學敵が標品製作法の不備を顧ずして徒らに標品所見を云々するものを罵て曰く余は某學生が「結核菌とは如何なるものぞ」との教師の間に「極めて小なる赤色の細菌なり」と答へたるを想起せざる事能はずと實は結核菌も他の細菌と等しく無色かりされど之れを見易からしめんが爲めに赤色に染むるを常とす學生は着色標品によりてのみ結核菌を知り其標品製作の手段に思ひ及ばざりしかりと

二、獨逸學生の禮讓

余は獨逸に來りて獨逸學生の禮讓に厚きに感服し日本の學生の此点に於て遂に獨逸學生に及ばざるを漸愧した二二の例を擧げて見れば標品供覽の時の如き我國の諸學校にては概れ先を争ひて混亂を極むる事恰も餓鬼のお齊に就くが如き觀をふせども(學問に熱心ある爲めか知られど)獨逸にて余の知れる範圍にては此の如き事無きのみならず往々にして先を譲り或は衆人稠密の際僅かに肘を他人に觸るも猶懇懇に其粗忽を謝するも誠に君子國の學生をして背汗三升からしむるのである或時僕がワルツブルヒ解剖學教室に於て局所解剖の供覽標品を見てゐた時左頬に力痕參差たる一學生が寄添ひて僕の觀てゐた標品を看る際誤て靴先を僕の靴に突き當てたのである彼は極めて不重なる態度にて Verzeihung、「お免を」と申候故僕も亦 Bitte、「ドー致しまして」と答へて其坐を放れしかば彼は倉卒として余の許に來り更に謝して云ふ様唯今「お免を」と申したるは私の粗忽を謝したるにて御身の標品觀覽を急がしたる次第にてはふかりし故何卒ゆつくり御覽下されとの事であつた余は既に熟覽の上かりし故其旨を告ぐるに

(通信)

加へて久しく彼を待たしめたる事を併せ謝した向ふが丁重である故禮に憫はざる余の如きも自から丁重ならざるを得ないのである是れは少し念の入つた方であるが先づ大体が斯の如き調子である故教授上にも多くの便利がある生理學のデモンストラチオンの如きは屢々精巧なる器械を精密に裝置するにあらざれば到底充分に實驗を供覽せしむる事困難である故多くは前日の中に講堂の卓上に裝置するのであるが(ワルツブルヒ生理教室にては)「觸るゝべからず」の一枚の紙片は偉大の威力を有して誰一人觸るゝものなき故如何なる精巧なる器械も安心して据着て置く事が出来るのである」又ワルツブルヒ大學にては學生が時刻に遅れて講義中に講堂に入るも列席の學生が足磨をなして遅刻者を辱かしむる習慣がある是れは講義の妨げさもありて宜しからざれど失行者に一定の制裁を加ふる事は必要と思ふ

三、寸鐵金言數則

- 大猷の肥大は現時の疾かり出版物増加の一証左たり知識の是れと共に増したる証左とするに足らず (Max Ruten)
- 事實の根據なき憶説は無價値なりされど關聯なき事實も亦無價値なり (Weismann)
- 木馬遊春駿不羈(從容錄)
- 萬事萬物皆變動して刹那も歇む時ふし獨り變動の機轉のみ永久なり (Henke)
- 彼等は眞理を証明するにあらず又其意志するにあらず唯自己の説を証明せんと欲するのみ(ギョーテガニュートン派の色感説を持つる學者を罵りたる警句の一節)
- 鐵牛生謝記 余は固よりギョーテの色感説に左袒する者にあらずと雖も此警句は僻學考の頂門の一針たるべきを思ひて抄出せるなり
- 若し神が眞理を予に與へんさふらば予は是れを辭して寧ろ自ら是れを求むる勞苦を擇ばん (Taine)

- 宇宙の萬象一定の行程に據らざるはふし吾人が見て以て除外さす處のものも亦定律の外に出づる事なし
- 學習と業野とは之れを區別せざるべからず學ぶ所は多方面からざるべからず開拓すべき業野は之れを一方面に限らざるべからず此は自然科学者には特に必要あり何さふれば自然の觀察には實に調和せる一般の知識を要すればなり
- 宇宙の現象は簡單なりき雖も其大なるを失はず何となれば最大の現象も常に小現象中に反覆するものなればなり
- 或る現象を正しく理解するには純なる觀相と常識とを要するのみ然れども此兩者は人の豫想するが如く通有なるものにあらず
- 各自然科学中數學の應用さるるに事多きもの程深く純正科學の範圍に入れるもの云ふべし (Kant)
- 手は數學が應用さるべき應用さるゝ間は是れを高尙にして有益なる學科として尊重す然れども一度其應用さるべき領域を越へて濫用せんとするが如きは賞讃すべ事にあらず斯くては高尙なる學術も迂愚の徒事と撰ぶ所あからん
- 世には理解し得べき事と理解し得べからざる事とあり故に能く是れを判別し熟慮して誤る事なれば若し夫れ思を此處に致さずんば或は終生不得要領の事に役々とするのみにして又一步を眞理に近くる事多からん若し能く是れを識別し得る智者は可能事の範圍に知識を廣むるを樂み得るのみならず延て理解し得ざりし領域に新路を開くに至らん莫遮吾人の理解し得る範圍は或る程度に止まり宇宙には人類の智能にて達し得べからざる領域ありて常に幾多の疑問を提出する事無窮からん
- 人類は宇宙の問題を解決する天賦を有せず唯其問題のある所を求めて自己の理解し得る領域に止まらんのみ
- 一説に對して反對説出で何れも眞なるが如く見ゆる時疑問生ず人は疑問

に安する事能はずして研鑽之れを究めて手段を盡すや此處に確定を見る是れ其目的あり人は此確定を得て安す而して誰か其以上に達する事を得べけんや

○人は各好む所を學ぶのみ

○天才とて獨りてわらくふる様には生れて居らず

○才能に乏しき輩は藝術の爲めの藝術に満足せず其作品によりて或る得ん眼前に見ん事を欲す然れども藝術が斯る世俗的目的と傾向とを有する

間は傑作は終に望むべからず

○宗教の威力を藝術に籍らんとするは釋すべきにあらず藝術家には藝術其物が宗教からざるべからず藝術に對しては宗教に關する事物も關せざる事物も同等の題目たらんのみ

○一藝一術其至境に達するは容易の業にあらず夫れ是れを察せずして力の及ばざる事を企つるは旁業者の常なり

以上カントを除く數節は何れも Eckermann, Gespräch mit Gaestube 中ギョーテの談話より抄出せるものあり中には藝術に關するものもあれど學術に對しても同様と思ひ列記せり

四、獨逸の學生團體

學生の團體には種々ありと雖も獨逸に特有なるものを Corps と云ふ其目的とする處は多分獨逸氣象養成にあるべしと雖も血闘鯨飲を以て最も顯はれたる特徴と云す Burschenschaft も稍是れに類す團體の異なるに從ひて各多少規定を異にすべしと雖も概してコーアにては一年生の會員を Fruchs と稱し二年生の會員を Bursche を稱す其中より三名の有階考 (Schlichter) を擧げ第一有階者は會員を統率し第二有階者は會計を掌り第三有階者は所謂 Fuels major にして Kneipabend (鯨飲會) の指探者なり各團體一定の制帽と綬とを有す制帽は多くは色雜沙にて作り團體によりて其色を異にす (赤、綠、黃、紫の如き目立ちたる色を用ゐる) 會員は學校に行くにも散歩す

るにも常に此を載く(帽子は小型にして後頭部を覆ふ様阿彌陀に戴くを法とす)講堂内にては之れを用ゐざるもレストーランなどにてビールを飲む時には制帽を脱せざるを常とす(婦人を除き其他の帽子は軍入の制帽と雖も脱するを習とす)團体旗を有し有階者は美麗なる制服 Uniform を有す儀式の時之れを用ゐる例へは大學創立記念日の如きには各團体の有階者は制服を着し團体旗を擁して式場に列す教授の葬儀の時の如き亦然り有階者の權力の大なる豫想の外にありて會員は絶對的に服従の義務を有す三年生より卒業に至る迄の會員を Inactive と稱し卒業後の會員を Philister 或は Alter Her と稱すフイリステルの中には老人あり高位高官の人ありと雖も亦時々制帽を頂きて青年會員の間に伍し往事の思出を新にするもの多しと聞く

●生沼曹六氏通信

(松原教授宛)

殿待樓よりの寄書端書難有懷舊の情に耽り申し候
ライプチヒには醫科の連中甚た少く文科の人多數を占め申候今年は非常に温かにて未だ氷江も出来不申候當地にては劇にも餘りまゐり不申候當生理教室はヘーリング先生既に七十六才の高齡なれば指導せらるゝ事少く幕下には目下俊才無之候從て小生は補助學科の學習に餘程時間を用ゐ居り候爲め非常に忙はしく候粹事には免角縁のかき方故トント面白き出来無之殘念に存じ居候當市在留者中には踊の稽古を始めお轉婆娘の習につかまつてツグングを踏で居る連中も御座候得共野生には其愚は學び兼候アイツシヤ一氏の首惑の講義には四五名のクラウガヤ女教師聽講致し居り候得共何れも二目さおがきるは面相には無御座中食の食卓にも二三名の令嬢お坐を
持ち候得共散步に誘ふ程の逸品には御座かく候。

●北歐旅行續記

在獨逸 田上清貞

▲コンペンハーゲン市立病院

市立病院は三年前の新築にかゝるもの、其宏大なること獨逸大學病院に比するも決して遜色なし、各病科の設けがあつて、就中眼科手術室の如きは其二三の器械と共に注目すべきものである、此處を出てから、眞向ふの植物園に這入つたが、我小石川の植物園より優れて居るものと見られふい。

コンペンハーゲン大學の眼科部は、目下建築中の爲に民家に設けられた假診察所を訪ふたが、教授は六十餘歳の人、諸機械の模様より察するに獨逸各大學の眼科に比して著しく逕庭あるやうに思はれた。

▲市立天文臺

夜汽車の發するまでには猶多少の時間あるを惜みて、空にまたゝく星の光を仰ぎながら、日中散歩の折に見覺れた植物園裏の天文臺へ志した所長ベシユレ博士は七十に近い老体を以て自ら親切に案内の勞をせられた、階段を上つて觀測室に入ると、室は直径五間餘の圓形にして、上半部は電力によりて廻轉する構造にあつて居て、圓い天井の一部が自由に開閉され、室の中央に据付けられた大望遠鏡に欲する方向に動かされ得る装置である、博士は予をして望遠鏡につかしめ、側に立つて種々天体の説明を與へられた、肉眼には一二分の大さにしか見えぬ火星が鏡面では確に五六寸もあらうか其中央に帶狀様の暗色を帯びたのは海洋で、其他何千里の大連河さ想像さるゝものが澤山あるさうだが、これは雲の爲に妨げられて認め得なかつた、星の南極端にあつて鶏卵大の白き光輝ある部分は白雲磁々の地であるさうだ、土星は直径六寸餘の環狀狀により斜めに圍繞せられて

其中に丸く輝き、霧星は北極星の側にありてこれも雲の爲に蔽はれしも、只一尾の根部と光端との二つの丸く光れるのを見た、此の星によりて地球の如きも或燃焼せる氣體より廻轉の際に分離して生じた事を想像さるゝさうだ、言ふまでもなく星學の進歩は數學の發達と相伴ふもの、六七十年前一學者が數學上より起算して、年月日何時分此方角に必ず或る星があらればならぬと斷言的に發見したのは即ち大王星であるさ語り終つて老博士は靜かに其星を仰ぎ見た。

▲日本人に對する丁抹國人の氣質

首府コンペンハーゲン市の滞在は僅かに四日間に過ぎぬが、到處市民の親切な歡迎を受けたのには無上の愉快を感じた、光線療法研究所員の懇切を始め、ルユドガルト博士が專攻の學を同うする所から食卓を圍んで語られたる、又或勸工にては支配人が屋上の裁縫工場より地下の倉庫に至るまで熱心に案内し、各陳列部に飾られたる日本品の紹介につとめ、更に又一醫療器械店に入れば、日本の聽診器の良好なるを稱へ、盛んに之を製作販賣せる旨を語り、一小雜貨店にて些細の買物をなせるにも、美はしき市申案内記を贈る、これらは商略上と見れば見るもの、途上の人に道路の方向を尋ねるにも、懇々數町の問も先に立つて導いて呉れ、訓盲院の校長の如きは電車の乗所まで見送らるゝふど、一体が懇切な國民であると思つた。

▲キール軍港

コンペンハーゲン市を辭して汽船に搭乘したのは十六日夜のことであり、海上極めて穩に翌十七日午前五時にはキールに着いた、前半部は軍港、後半部は商港になつて居る、人の知る如く聯邦の皇帝は、全獨逸陸軍を統御する事が出来ぬが、之に反して海軍はビスマルク公政策の結果、普魯西亞王が皇帝たるに及んで、始めて獨逸海軍の創成せられたといふ理由によつて、カイゼル陛下は海軍にのみ對しては大元帥たるの資格を有せらる

るのである、近時獨逸海軍が凄しい勢を以て大擴張を行ひ、英先づ是に拮抗し、延ては世界列強の海軍政策に響を來しつゝあるは今更説くまでもあるまい、本年(一九〇九年)九月此地に於て飲食品其他十數種に對して増税を斷行した處から物價の騰貴さまり、勞働者の不平を鳴らすに至つたといふのも、いづれ大擴張に伴ふ結果たることは争はれぬ、されば獨逸第一の此の軍港が、如何に壯觀を極むるか、予は港畔の旗亭に中食を認めつゝ、灰白色に塗られたる十五隻の戰艦が威風あたりを拂つて錨を下せる光景を見て、心竅かに思ふた、軍艦一隻の建造費正に一千五百萬圓、これあらば二個の大學が新設され得るであらう。

▲キール市

キール港のある所は、即ちキール市である、市は人口十八万、家屋は概ね新しく海濱に沿ふて美事に列される海軍士官の官舎、海軍兵學校および五層樓の宏大な海軍兵營や、其他海軍に關する諸種の工場の如き大建築物が多い、商港に達するには軍港を経て航しおければならぬのである、

▲キール運河

平易に言へば、丁抹國は大きき岬の如く獨逸の北方、キール港と漢堡港との間から突き出されて居る、軍艦は東海のキール港より北海に達するには、此の大きき岬を廻航しおければならぬ、されば有事の場合には頗る不利であるといふ、即ち海軍政策上および商業的關係からして、東海と北海とを連絡すべく、所謂キール運河が十年の日子を費して、八年前に貫通された、其長さ日本の二十五里市三十間深さ五間、これを通航するには八乃至十時間を要するさうだ、今や又取擴めの工事である、予は最初此の運河を航すべく楽しんで居たが、計らんや、貨物用商船と軍艦の外は一切通航を許さずといふ事であつた。

▲漢堡港

佛國マルセーユは白耳義アントツアア共、歐洲大陸に於ける商港と

して名高い漢堡港はエルベ河口にあり、長さ二里中一里水深二十八尺と稱せられ、港内に散在せる多くの三角島には造船所、ドック、鐵器、砂糖、製粉其他諸種の工場、五層乃至七層樓の大倉庫が剩す所なきまでに建てられてある、即ち此の三角島は自由貿易港に屬し、それ以外の部は保護貿易港になつて居るのである、斯の如く二様に組立てられてあるが、漢堡港の一大特色として今日の繁榮を招いた所以である、外國より種々の材料を持ち來つて、三角島上の工場に於て加工し、直に之を海外に輸出するを得るが故に、税關を經るの面倒なく、却つて物品は廉價に他國品と競争することが出来るのである、ウエスキ、アランダの如き一二年間も保存を要する酒類は、米國紐育の倉庫質が高價な處から、態々獨逸に送つて此の自由貿易港の倉庫に預入れ、或期間を經て再びこれを送り歸して、初めて販賣する場合もあるさうだ、島の到處に税關があつて、隣の保護港に入るものには悉く課税すべく其監視を怠らぬ、港内は三角島によりて幾多の區劃を作り、亞細亞、亞弗利、南北米の各航路の波止場には、一萬噸近い大船巨船が横付けに打ち並び、無數の荷上器械が電力を借りて絶えず運轉し、殺類の如きは大なる唧筒仕掛の管で吸ひ上げられて居る、帆船のみの波止場、浮船渠、物の響きと煙は港の空を壓し、迪か彼方には石油倉庫が山脈のやうに列まつて居る、或る區劃より他の區劃に入るには水面上に閘門を設け、番人ありて小船の通航毎に電力を以て扉の開閉を掌つて居る、獨逸商業が英佛を壓し、或は極東に於て日本と拮抗せる由々敷活動不りが宛がら一幅の縮圖のやうに並べられて居るのである。

▲漢堡市

人口八十萬、獨逸第二の大都にして、貿易及び商工業の盛んふるは、わが大坂に相似て居る、十數年前には虎列刺、窒扶斯の如き惡疫流行し、又往年ペスト病の猖獗を極むるなど、頗る不健康地なりしも、今や此の市の衛生機關は遺憾なく完備し、衛生學的理想的に活用する處大に世人の

注目を惹くに至つた、人若し現今の衛生學進歩の状況を知らんざ欲せば、須らく伯林に次て本市を訪ふべき必要がある、一昨年萬國衛生學會を此の市に於て開いたのは寔に事宜を得たことであつた。

▲陸上消毒所

門をくぐると長さ三間中九尺もあるべき五臺の箱馬車が並んで居る、傳染病患者から棲床椅子卓其他總ての器具を運ぶに用らるゝので、其内部には嚴重な區劃が設けられてある、運ばれた器具類は五つの大きな消毒蒸氣竈によりて、消毒濟のものより自然的に反對の側へ吐き出される、汚染せる衣服は更に洗濯場に送られて蒸氣器械にかけ、直徑六尺餘の石鹼水を湛えた大桶の七八つに之を浸し、遠心器にて絞上げこれを乾燥室に運べば三間四方もあるべき織物が、容易に火熨斗にかけ得る装置にあつて居る、斯くの如き洗濯所は大抵の病院に設けられてあるから、別段珍らしいといふ譯では無いが、只感すべきは病家の室内消毒法である、これに必要な刷毛、筲、鋸、

▲船舶消毒所

漢堡港内の一定の場所に二百五十噸の消毒專用船が碇泊し、何時にても活動し得る如く縮えず煙を吐いて居る、船舶消毒の主眼は船内の鼠を驅殺するにあるが、極めて困難なるため日本では未だ完全に行はれて居ないらしい、此の專用船は有毒瓦斯ふる一酸化炭酸を以て僅三十秒時間の内に、大船船の鼠を悉く毒殺し防疫を完全にするのである、船は八年前衛生官ドクトル、ノッホ氏の考案によりて造られたもので、其中層部には大籠ありて有毒瓦斯を製造し、唧筒管により之を消毒すべき船内に送り、後更に空氣を送致して瓦斯を排除するのである、外國航路の船舶は入港毎に此の消毒法を行はるのである、六千噸餘の大船を消毒するにも、僅に百五十圓の瓦斯料を要するのみださうである、船具および被服用の消毒竈もあり、浴場も設けられ、小さくきれいによく整頓して居る、九月中旬北里博

士本船を參觀し、訪問録に自署せられてあつた。

▲珍らしい動物園

獅子虎熊等の猛獸を飼育し、繁殖せしめ諸藝を演ぜしむべく馴養せるは、世界中此の動物園あるのみである、園はハンブルグ市の郊外にあり先代ハゲンベック氏(十一年前七十七歳にて死す)の創業する處、一私人の施設として驚くべき大仕掛で又成功したものである、先頃は皇帝陛下の行幸があつたさうである、此園からは各國に猛獸を供給し、上野の獅子、麒麟なども此處で飼はれて居たものである。

飼養動物はあらゆるものを網羅して居るが、中にも獅子虎白熊の子が二十四あまりと、猿が三三十四、うれに豚三頭を金網張りの大きな一室中に同棲せしめ、十歳ばかりの一人の少年が交つて嬉々として遊んで居た、猛獸は小猫の如くに柔順に頭を撫られて居る、かくして猛獸を馴らしつゝ、少年はやがて猛獸使ひにゐるのであらう、予の見た時には白熊の藝當が始まつて居た、只見る舞臺上には二十頭あまりの大小の白熊が立現はれ、梯子乗をやつて居る、又一匹の小白熊を乳母車に座らしめ、親白熊が後足で立上りつゝ其車を引き廻す、此の恐ろしい子守は人間の兒を守らしても差支あるまいと思ふ程巧みにやつてのけた、珍奇なのは本園で生ました獅子と虎との混血兒と、馬鹿であらう、馬鹿はいかにも可笑しく出来て居る、色は黒くして体の大きさは馬に似、脚は頗る長くして恰も麒麟に類し頭には鹿のそれの如き二本の角を戴き、顔は争はれぬ本家本元の型に嵌つて居る。

内園は頗る宏く、其特徴とする處は天然の景を摸して動物を飼育するにあるのである、所々に岩石を以て疊める山あり洞窟を穿ちて獅子、虎熊等を棲息せしめ、印度人は象に跨り、亞刺比亞人は駱駝に騎して廣漠たる園内を徜徉しつゝ、節面白く本國の牧歌を唄ひ、或は黒人の男女三十人あまりの一團が蠻地の家屋、風俗を宛らに此に移して營める光景は壯大興味

を感じしめるのである。

動物演藝館および四五の大料理店があるのを見て、同園の設備の大方を想ふことが出来るが、元來猛獸使ひの親玉が創めたものなれば、學問的に秩序あるものではない、猶園内には日本庭と稱する一部があつて、赤い鳥居の上に蓬萊の二字を彫んだ額面を掲げ、雅致ある金燈籠や石の燈籠を立て、盆栽の數鉢をも飾つてある。

▲眼科大家ドエチマン博士を訪ふ

博士は漢堡市眼科開業醫の泰斗にして、手術の巧みさは塊國ウイン大學のフックス教授と並びて其名を知られて居る、十月十八日博士を其診察所に訪ふたが、明日重ねて本宅の手術室に來れとのことであつた、本宅には多數の病室と整頓せる手術室がある、先づ最初に白内障および虹彩切除の三例を示し、更に先生獨特の網膜剝離の五例を手術前に眼底を檢することとを許されたが、何れも重症のもののみであつた、刀は先生の考案になる獨特のもの加ふるに手術の輕妙なる、技眞に神の如しとはそれらを言ふのであらう、網膜剝離症に對する注射藥の製法を授けられ、又先生創意の血清を與へられたのである。

▲熱帯病學研究所

漢堡のほゞり、海眞病院と相並びて建てられてある、獨逸の地は熱帶では無いが商船の熱帶地に往復し、亞弗利加、ホツテントツト等に其領土を有するがため、又更に世界人類の爲に此の研究所が設けられてあるのである、梅毒病原體はシャウザン博士によりて發見せられたのであるが、博士は實に此の研究所長として名聲高かつた學者である、然るに三年前三十四歳を一期として永眠せられてからは、トラホーム病原體の發見者として、且原虫學の泰斗として名あるプロファツエック博士相嗣いで所長さかつたのである、博士はバタビヤに於て猿の梅毒關係を研究して後日本に漫遊されたこともある、予の訪問の際は折悪しく旅行中にして、會ふを得なかつた

が助手ゴントル氏あり、詳細に所内を案内された、マラリヤ病、黃熱、デング病等を媒介する各種の蚊を飼養し、巧みにこれを繁殖せしめてあつた、試験動物としての各種の鳥類又各熱帯病理標本、マラリヤ病の各時期に於ける種々の血液標本あり、流石に世界稀有の原虫學研究所たるに耻ぢない整備がせられてあつた。

▲海員病院

海員の家族および港附近の病人を收容する病院にして、他と異なるは醇漢を收容する八つの病室あり、床の上に直に藁蒲團を敷き、別に檯臺は設けてない、警官の收容し來るものあらば、此室に入れ醒覺後入浴せしむる仕組におつて居る、精神病室は二三日を留置して更に他の病院に送り、分娩室は労働者若くは貧民救護の目的を以て設備せられ、百四十の病室あり、其中に一人の印度人あるを見受けた。

▲一般病院

市の中央にあり、新築にして各科の設けあり、エツキス光線部は能く整頓し、折柄白血病患者の脾臓にエツキス光線療法を施して居る處であつた、近來不治症とせられた子宮筋腫にも此の療法を行ふさうである水治療法部には電気浴、砂浴、泥浴其他各種の浴法あり、又單に腹或は脊肛門等一局部に水治療法を施す器械、整形術に關する諸器械もあつた、眼科には眼神經學のウィルブラン、ゼンガルの二先生あり、其著書は世に廣く顯はれて居る。

▲エツペンドルフ病院

十數年前ハンブルグ市の郊外に新築されたる本病院は、伯林ウィルヒヨ病院と相並びて其名高く、而も本院の病室二千五百と註せらるゝは、實に獨逸最大の病院であらう、バラツク式の建築にして其棟一百に分れ、六十乃至七十名の醫員と三百五十名の看護婦を有し、各科の設備は漸新にして秩序あり、就中外科手術室の如き、或はエツキス光線部、整形外科の諸器

械より水治療法部の設置に至るまで總て完全なものであつた。

ベルマントバードは火傷、悪性化膿性炎の患者を、二十五度乃至三十五度の温湯中に其病症によりて或は數週或は數個月間晝夜を問はず、持續的に入浴せし置くのである、温湯は絶えず流出して新しく浴場中にはゴム製の寢床を設け、又其上に板を渡して入浴し乍ら食事をせらしめ、或は新聞雜誌を讀みつゝ無聊を慰するの法を設けてある、現に六名の患者が居たが其中に一人の子供が玩具を弄して居るのを見た。

急性および慢性傳染病隔離室と數棟の結核病室あり、共に換氣、光線の關係については用意周到なものであつた。

眼科部は整頓せる三層樓の建築にして九十の病床あり、廣き廊下には數多の植木鉢を列べて患者の慰めと爲し、嬰兒室には生後二三月の病兒十一名に二人の看護婦附添ひて賑しき泣き聲の中に哺育、看病一切の世話をして居た、又別に十歳内外の小兒室あり、總て小兒の入院には便宜におつて居る。

歐洲大陸の公立病院が何れも慈善主義を標榜し、而も能く其實を擧げて居るが、顧みて日本赤十字各病院の名實相反せる治療主義に想ひ到れば、長く燃然たらざるを得ないのである。

▲博物館

漢堡工藝美術館中には、日本品部あり、原技師之に主任として整理に力を盡くして居る、漆器陶器鑄金象牙細工繪畫等日本の古美術品を聚め、博物標本館には禽獸昆虫の標本を始め、人類學上および各蠻人に關する種々の參考品は最も法目に價すべく去つて美術館に入れれば多くの繪畫中にも、凄愴畫家ベックリン畫伯の製作が殊に人目を惹いて居る、閑く茂れる森林中に一基の墓あり、燈明幽にゆらめへあたり、白衣の尼二三ありて靜肅に膝行默禮せる状を描き、森の一方には夕陽血の如く海を染めて正に沈まんとする處、明暗二様を象徴せるものにして畫面嚴肅、凄愴の氣入の心

を刺すものがある、更に歩を進めて一名畫の前に立つた、フリドリヒ一世出陣の雄姿を畫いたもので、即ちメンツェル畫伯の大作である畫伯は現代獨逸の大家と歌はれ、碩學ヘルムホルツ先生と共に現皇帝の友人として、自由に宮廷に出入した人であるが、既に今春物故したのである。

▲和蘭

漢堡市を創立して和蘭へ向つたのは十月廿三日朝の九時半であつた、十一時半には瀛車は獨乙第二の商港ブレーメン市を通過し、一時十三分オスナブルク市に着いた、此市は往古歐洲の大亂二十年戦争の平和談判が開かれた地として、歴史上有名な處である、瀛車は彌々進行して午後二時を過ぐる頃、和蘭國境を隔れた、國境と雖も山ありて險しからず、河ありて沮むのでもない、獨蘭二國は亘々たる平野を以て強弱相隣して居るのである、これを歐洲大陸の何れの邦に尋ねるも、國境の難易が關りて其國盛衰の歴史を作つて居ることは争はれぬ事實であらう、オルデンツ驛に到れば税關吏來りて検査を行ふ、事は極めて簡單である煙草の有無に對して答ふるに否の一語を以てすればそれでいゝ尤も獨逸も丁抹も共に懲ういふ風な寛ふ調子ではあつた、凡そ税關の嚴重なること、世界中恐らく日本の如きはあるまいと言ふ話だ。

▲ウトレヒト市

午後四時半、和蘭時間け濁逸に遅るゝこと四十分、ウトレヒト市に着いた、停車場には京都大學醫學の井上博士が出迎はれた、博士笑つて曰く乃公は和蘭留學生の總代だよ、蓋し同胞の此地に留學するものは只一人の博士あるのみである、ウトレヒト市は、人口十一万、大學町として名高い。

▲女王と婦人科教室

和蘭の皇嫡が七八年前、獨逸メクデンブルク國から來られて此の方、女王が數回の流産に御名聲頓に擧らふかつたが、此の春始めて女王の御降誕

を見たので、國民の歡聲潮のやうに湧いたのである、ウトレヒト大學婦人科のカウエル教授は女王の産褥毎に拜診した人で、學者としてのみならず、這度の慶事にあづかつて一層其名を高めたのである、されば此の婦人科教室の勢力は隆々たるもので、外科教室の如きは始と其附屬としか見られぬ、日本の産婦人科醫をして之を聞かしめば、羨望措く能はざる處であらう。

▲産婦人科教室と外科教室

兩教室は共に大なる一棟の中にある、産婦人科教室は一年の入院分娩數一千七百人病室八十を有す、予の參觀の折には二十五人の妊婦が便々たる腹をかへて、瑞氣堂に満ちて居た、分娩室の清潔にして心地よく、手術室の整備せる、研究室の材料及び標本の豊富なる、分けても産科用箱子の如きは、古今に渉る多くのものが陳列せられてあつた、蓋し箱子用法は醫によりて發達したのである、又彼の三百年前に於て狹骨盤についての最初の研究者、デウエンテル教授の肖像を掲げられてゐるのを見た。

外科教室は病床百二十、ラメルス教授あり、其設備は産婦人科教室に倣似た處はあるが、格別記すべき程の事も見受かつた。

▲眼科教室

和蘭醫學が眼科學上に貢獻した點が數くは多い、數年前物故した此の教室のステルレン教授は彼の試視力表を創案制定し、生理學者ドンデルス先生は眼調聲屈折學の基礎を作つた、又日本に於て初めて西洋眼科學を傳へたのは、蘭醫として長崎に寓居した獨逸人シーホルトである、十月二十五日予は此眼科教室を訪問した、今の教授は令息ステルレン氏にして、齡四十餘、長身禿頭いかに温厚な人である、日蘭兩國の深い縁故からして教授は欣然として迎へられた、診察室の正面には、ドンデルスを中央に其左右にはグレーフ、ヘルムホルツ諸先生の石膏像あり、床上には先代ステルレン教授の立像が飾られてあつた、何れも新學上崇敬すべき學者である、

教室は一八八九年より一八九四年に互りて完築された、稀に見るの大建築ではあるが、その設備および研究室の状態に至つては未だしき言ふの外はあるまい。

▲眼科教室訪問録と日本人

蘭學は明治文明史を照らした最初の光明である、明治初年より已に此地に留學し或は漫遊を試みた日本人は尠く無い、スネルレン教授が示された眼科教室訪問録を開いて見る。

明治四年六月 伊藤元白

同五年八月十八日 山脇玄

同年同月十九日 長與專齋

同十五年二月十五日 井上達也

同年同月十八日 三宅秀

これらの諸氏が日本文字又は歐文字を以て、自署した筆のあとを見て感慨に堪へなかつた。

附言して置くが、伊藤元白は現佛國眼科學の泰斗ランドール博士と同時代に此の教室に留學された人で、今春予が伊太利の萬國眼科學會に臨んだ時、ランドール先生から親しく其旨を聞かされて居たので、今日あたり此の自署を見て深く敬意を表したのである。

▲ランドール博士

ウトレヒト市より瀛車一時間にして達す人口三万の小都會ではあるが、此市の博物館には日本品の豊富なること、歐洲第一と聞いて居たから、態々下車したのである。

▲博物館の日本美術

日本美術の聲價は、歐洲到る處に於て高評を博しつゝあるが、就中和蘭は古くよりわが國と交易を開いた國だけありて得難い多くの珍品を聚めて居る、丁髷の武士が六人、袴袴を着た、これも六人の花魁を前にして、遊

(通信)

興せる處をこしらへたもので、何れも等身六の人形である、室には疊を敷きつめ、蠟細工の大きな鯛の焼物が高脚の膳に据ゑられて容の前にあり、德利、盃など夫々の位置に置かれてある、花魁の三人が三味線を手にし、三人は踊つて居る、其他にも一つ武士の奥方が供を伴れて奥服屋に買ひ物をして居るのがある、妙髷を結つた奥方が反物を選つて居る、其向ふには丁髷の番頭が帳場で眞物の大福帳を開いて居る、硯函も十露盤も取揃へ、總て實際を模した極めて精巧な出来である、石の地蔵がある、年月日並に施主の名をまで刻つてある武器には大小、鎗、劍、鎧、兜、鐔、弓、矢の類より馬具に至るまで集められ、申にも葵の紋を散した蒔繪の太刀は頗る美事なものであつた、大工左官の一切の道具から日本家屋の模型、挽白其他茶道具一式花瓶、水盤並に高蒔繪、又は青貝細工の硯函、違ひ棚の如きは本國に於ても珍品とするに足るもので、金色燦爛として眼を射るものは佛壇である、東京愛宕山の小模型や種々の懸物の中には淺草觀音堂前盛況の圖長崎出島に於ける蘭人居留地の圖などがあつた、又風呂桶、下駄、傘の類に至るまであらゆるものが網羅されてある、以上は何れ維新以前の製作にかゝるもの、品の價値は今出来の薄べらふものとは趣が違ふ、古色蒼然たる處は見るからにかつかしい想ひがする、予は後にロンドン二三博物館に於て多くの日本美術品を見たが、和蘭のそれには比しては遠く及ばざるを知つたのである、猶此の博物館には日本書籍を藏し、前日に申込まば閲覧出来るのである、日本に於ても得がたい珍本奇書があると史學專巧の同胞から聞いた。

▲動物標本陳列所

京都醫科大學の足立博士が、曾て此處に比較解剖を研究された一事に徴しても材料の豊富なることが想像される、動物學教室の附屬であるが、予は動物學者ヘイスン博士の案内によりて縦覽するを得た、象の骨格が十數体もあり、哺乳動物より鳥類、蛇類魚類兩棲動物の完全な多くの骨格と、又

割製標本は以上の諸種類の外虫類貝類に至るまで悉く保存されてある、日本産の中にも栗鼠の愛くるしき、越前蟹の怪物の如きも、足を張らば四五尺もあらんづらんと思はるゝもの等があつた、餘りに多くの標本を見て神疲れ足勞するの思ひがした、博士は彼の伊藤元白を知れりさす語られた。

▲海牙市

萬國平和會議を以て其名を知られたる和蘭の首府より、人口二十萬を有す、ライデン市より流車十五分を要するのみ。

▲平和會議と其會場

平和を愛し給ふ露西亞皇帝の提唱に依て初めて萬國平和會議が海牙市に於て開かれたのは、日露戦争二三年前の事であつた、而も露國は間もなく滿洲を占領し、兩國の平和は竟に擾亂された、忠勇義烈なる我が將士は血を以て平和を永遠に解決した平和？平和？筆を以て是を論ひ、口を以て是を叫ぶも开は畢竟兇戯に類するに過ぎない、學術の進歩も商工の發達も、戰によつて獲得たる結果は、つれにそれを示して居る、獨り武力の戰爭を避けんとするは事理上已に不可能の事に屬する、見ずや尙武の氣魄なき國民は情氣と衰退の空氣に包まれて居る、和蘭、丁抹、西班牙、支那皆然りである、是等の國民は利に懸くして何等國家的觀念を有して居ない、併し予は勿論戰爭を謳歌するものではない、只戰爭の避くべからざる所以を知り、國家も國民も大なる土氣を溢るゝばかりの奮闘心を失はないやうに努めたいのである、ザールは戦争後更に第二平和會議を海牙市リンチンホークの中リツテルザールの建物に於て開設した、リンネンホーフとは種々の建物あり、輪狀區劃をなせるの意である、門をくゞつて直ぐ左の方に餘り大きくばない古風の建物がある、これぞ昔の侍所ありしを、會議場に充てたのである日本梅花模様刺繍を以て飾られた一室があつた、平和會議場は刻下新に起工中だ。

▲和蘭の風車

和蘭とは其邦の一州の名で、實際はニーデルランド(即ち低地の意)といふのである満目只これ平野、山さいふものは見たくさもない、海面より一二間も低い土地が往々あり、海岸には堤防を設けて浸水を防ぎ、港の入口には閘門ありて船の通行毎に開閉するの仕掛になつて居る、果てのない大平原には縦横に水路を通じ、大さき和蘭式の風車が到る處に設けられてある、粉屋に用ゆるのではなく、排水に使用する爲である又は是を動力に用ふる工場もあるさうだ。

▲水利組合

排水の方法完全ならざれば、和蘭國內が一面に水とふるであらう、此國の生命は一に排水の如何によりて、左右せらるゝ如き危険な状態にあるのである、故に全國には幾多の水利組合が最も進歩せる方法によりて組織され、其事業と行政法は頗る發達をなして居るさうである、日々の新聞紙が各地の水量と又毎日の排水量を怠らず報道して居る、水道の施設は全國五分の一まで行渡り、是亦非常な進歩を示して居るのである。

▲大英國

和蘭ロツテルダム市を過ぎて、フウク港に着いたのは十月二十六日夜十一時半である、埠頭場に到れば船は已に横付けにせられて待つ。船室は美しく整へられ、枕の下に災時用の浮袋を備へたるなど注意周く行き渡つて居る、此夜海上靜穩にして、快く大英國を夢みつゝ翌朝六時半、英國ハルウイチ港につく、此處よりは瀛海にて倫敦に向ふ、英國の流車は動搖至つて少く、車窓より繪に似たる牧場の光景を眺めなどしつゝ、走るこゝに纏て約十五分、此時他室に在つた一英人徐ろに予の車中に入り來つて、昨日夕刊の倫敦新聞を、グラシアを示す、さては聞きしが如く親切ある英國紳士の態度よと私に感謝しつゝこれを開けば豈計らんや。

▲伊藤公の凶變

ハルピン、聖アタス東京の各所より至れる電報は、一齋に此の驚くべ

き悲むべき凶報を傳へて居るのであつた。

想ひ起す四十餘年の昔、一介の書生として此の英國に航し、日本文明の基礎を作つた偉人伊藤公の凶變を、今日英京に入らんとするに際してこれを聞かうと思はふかつた、予は悵然として言ふ所を知らふかつたのである、英國紳士又弔辭を述べ、予は握手を以て其厚意を謝した。

英京に入つて是を聞けば、二十六日の夕には倫敦の各新聞は齊しく號外を發して公の遭難を報導したさうである、予は彼の紳士から示された新聞紙を永久の記念として割愛を受け、これを保存して居る。

▲一哩一千万圓

歐洲大都市の繁榮は、何れも其市の中心たる二三の大通りに於てのみを見るが、此の倫敦市は何れの街區に立入るも般賑を極めざるは、路上には巡查ありて絶えず激しい車馬の往來を制する瞬間を見計つて、疾走しつゝ之を横切るので、危険千萬なこゝではある、地下鐵道は地下一百五十五呎の處に縱横に貫通され、軌道は廣軌式日夜間斷なく電燈は輝き、要所には停車場を設け、プラツトホームを合せて其幅三間もあらうか、物賣も居れば種々の廣告も張られてある、地上からは昇降器を以て上下するやうにまつて居る、往復のトンネルは別になつて居るから速度は非常に早く車体も美しく風過しも申分がよいから又極めて乗り心地がよい、此の地下鐵道は徑九尺ばかりの鐵管内を電車が走ると思へばよからう、然してその埋設工費は一哩凡そ一千万圓を要したさのこゝである。

▲公園

都市衛生上、公園の必要ふことは論ずるまでもない、倫敦市には十二三の公園あるが、中にもハイドパークは最も規模の大きいもので、森林には鹿が彷徨ひ、湖水の如き池には美しい水禽が巢を造つて居る、レントゲンパークの森には澤山の栗鼠が棲んで居る、胡桃を興へる腕の上に這ひ上つて、美味さうに食へる處はよく人馴れたものである、其他ウイクトリヤ

パーク等も廣きに於ては相譲らふ、青い芝草は冬に至つても美しくその色を變へないさうである、地下に温鐵管が敷かれてあるさは、これを言ふ西洋人の諺である。

▲名物の霧

其日は十一月四日であつた、テームス河畔の病院參觀に出掛けた、時は正午に近いのに河は一面黄色の霧に蔽はれ、向ふから來る人の顔が判らふ、街燈も商店の目にも皆點燈して居る、煙突の煙は空に上らずして地を匂つてるから、煙鼻が甚だしく鼻を刺す、のみならず涼車に乗つて居る如く鼻孔を眞黒にしてしまふ、名高い霧の倫敦は、いかに不快な念を起させるのである、美くしい雰圍氣の中に生れた日本人の幸福を神に謝さればふるまい。

▲國會議事堂

テームス河畔ウエスト、ミニンスタ街に有名なる大寺院ウエスト、ニンスタ、アベールと相對峙して、天に聳ゆる大建築物がある、是が立憲政体の魁を以て世界に誇を有して居る、英國の國會議事堂である、茲に極東立憲政体の民たる予は、これが參觀の機會を得た、入りて上院の大廣間ある謁見室を見る、室の左右の壁上は各五六間餘の大壁畫を以て飾られてある、即ち一方はウオタルローに於けるウエリントン公、又一方はトラファルガに於けるチルソン卿を描いたもの、事蹟は英國史上の花、畫は勇戰奮闘の狀眞に迫るの手である、更に正面にはウイクトリヤ女皇三十歳前後の大理想像が安置せられ、人をして襟を正さしめるのである、上院議場は所謂中央廣間にして、絨緞を敷き詰め、天鵝絨の大ききソファは議長席とし、其前には二三の必要書類を載せられたる書記官の卓が二基配置せられ、又議長席の後方一段高き處は玉座である、平土間の左右には十四人宛停座し得る、緋天鵝絨の腰掛が五つの階段上に各二列に並んで居る、これが議席で番號を附してある、傍聽席は至つて狭く、男女席の別になつて居るが、

(通信)

辛うじて十數人を容るるに過ぎない、上院より下院に至る廻廊には八種の歴史壁畫あり、又上下兩院の玄關廣間および廊下には名士の半身像が飾られてある、こゝは議員としての名ある人のみで上院の方にはグラッドストーン、ラアセル、スターフォットヘンリ、グランウイイル等の像を見た、下院の議席は別段上院の設備と大差はふい只異つて居るのは椅子の天鵝絨の色の青いのみである、日本の如く議長席が一段と高く設けてある譯でもなく、且總ての設備が極めて簡單質素であるのは、却つて興味しく思はせるのである、限内には食堂圖書室および議員の禮拜堂がある、又下院の後方に別に設けられてある一室は、議員が休息時間に杯を鳴らしつゝ虹の如き氣焔を吐く場所である下院の入口の石段上に

「千六百四十八年チャールズ一世、此處にて死刑を宣告せられたり」
と刻んである、要するに多くの歴史を有する英國議員の建築は、壯嚴なるロシツク式にして毫も華奢浮薄のあとを止めず、莊重端嚴あくまで英國式の特徴を發揮して居るのである。

▲寺院と名士

歐洲寺院の堂宇内には名士の墳墓がある倫敦でも聖パウルス、カセドラルおよびウエスト、ミニンスタ、アペーの如き大寺院には國士として葬られたる多數名士の墳墓がある、前者にはウエリントン並にテルソンの墓があつて、鐵製の大花環が飾られてある、幽獲せる大砲より造つた棺蓋の重さは二万ポンドもあるさうである、國葬當時の柩車も其まゝ残つて居るのを見た、後の寺院にはニュートンの墓がある。

國士名士を遇するの途は勿論何れの國に於けるも丁重を極めて居るが、殊に英國に於て然るを覺はた、予がテルソンおよびウエリントンの墳墓に詣つた折には恰も多數の小學兒童が、其靈前に列して諄々として教師から訓話を聽いて居る處であつた、偉人崇拜の念が斯くして小國民時代から其頭に注入されるのである、本邦に於ても靈堂或は廟所を建立して忠君愛國

の士又は碩學鴻儒の靈を祭らば、國民教育上一層の感化を與へるこそであらう。

▲記念碑及肖像館

到る處の四辻又は廣場には、記念碑若くは銅像の建設されてあるを見る、英國銀行前の四つ辻には馬上のウエリントン、又同銀行の裏手には今の郵便制度の基を開いたベニー郵便の率先者ローランド、ヒイル氏(一八四〇年死)の銅像がある、美術館前の廣場には高さ十數間餘の圓柱上に、英姿一世を降服せるネルソン卿の銅像がある、即ち此のトラファルガ記念碑前美術館には伊佛れよび和蘭の名畫が藏され、又其傍の三層樓の肖像畫館には、歴代の帝王クインを始めとして文人武人學者等あらゆる古今名士の肖像が網羅されてある。

▲英國銀行

日本紙幣を見馴れた目を以て英國の紙幣を見る時は、誰れしもその紙質の薄くして勿体なきまでに御粗末あるには驚くであらう、而も其兌換紙幣を何時にても直に引換ふべき正貨準備のある國は世界各國中獨り英國あるのみで、これ英人の大に誇とする處である、若夫れ紙幣の精巧にして立派な國ほど貧乏國とすれば、さしあたり獨逸や日本の如きは遺憾ながら其御仲間入たるを免れまい、倫敦市の中央、銀行街の角に煤煙に燻ぶれる石造一階の舊式の建物がある、これなん世界の金融界を左右し、日東借金國の債權元たる英國銀行である、壯麗眼を驚かすの建物と思ひの外の、みずばらしさは却つて敦厚堅實な英人の氣風を偲ばしめるに足るのである、これを近來の米國あたりより日本に輸入されつゝある、拜金下劣の思想に比べて殆ど雲泥の差のあるを思ふ、英國銀行の縦覽は普通には許さぬが予は今わが正金銀行支店の盡力によりて參觀することを得た、手形即ち紙幣印刷室は十數臺の機械が電力によりて廻轉して居る一臺一日の印刷高は二万五千磅(二十五萬圓)ださうである、又印度の五ルーパ乃至百ルーパ紙幣をも

齒

印刷して居るのを見、何れも同型同番號の正副の紙幣を印刷し、副は控さして銀行倉庫内に保存して置くのである、倉庫入口の一室には三人の役員ありて日々、倫敦の各銀行から回収された紙幣の一隅を切り棄て、之を相當の束にして五個年間保存されるのださうである、月曜日(十月二十七日)の回収高は實に五萬七千二百三十六枚、即ち八十萬九千七百三十五磅である、其役員が語つて居た、又一行員は千六百九十九年(二百十年前)に發行した一枚一百萬磅の(わが一千萬圓)紙幣を見せた、次に又小札一千萬圓入りの袋を示されたを試みに持ち上げて見ると、僅に一貫目の重ささへ感じなかつた、人間一生汗水をたらして働くと、一千萬圓の富を作るは蓋し容易きことなからう、而もその金は今予の片腕にも足りぬのである、米人の如く日々齟齬として非の前に平身低頭するは愚の骨頂ではあるまいか、朝に道を聽いて夕に死するも可、人も正しい道さへ踏めば黄金は水の泡も同然なものであらう穴藏の眞暗き倉庫に下るには電燈を要する此倉庫には所謂紙幣の臺帳が格納されてある、蜜柑函を順序正しく積み上げたやうなものである、金貨検査部には二十五臺の検査器ありて、日々流入し來れる金貨の目形を量つて居る、若し少しにても輕量な時は直に撥れ除くべき自働装置である、銀貨部には検査がない、これ補助貨幣たるの故である、總じて各課の役員は少數なるにも拘はらず、繁忙なる事務を敏活に處理する處は日本人には働けさうにはない、此英蘭銀行と相對せる向ひ角には倫敦取引所がある又此附近には各國の銀行支店が設置せられ我正金、三井、郵船、高田商會の支店も此處に在る、是等日本の店には何れも日本人十數名ありて主要の位置を占め、其下に二三十名宛の洋人の役員を便役して居る。

●永井人雄氏通信

(伊藤哲一氏宛)

(通信)

全氏は明治四十三年本校醫學科を卒業して軍醫を奉職し強固の意志と沈着の態度とを以て細菌學に深き興味を抱き汲々研學に倦まず先頃金澤より臺灣に轉任して今此通信を得たり臺中の風土願くは全君の健康を害せざらんことを祈る

學友哲一兄本日予に向つて信書を投せられ貴官の勇健なるを知るに金澤醫學會の隆盛なるを承り欣賀奉り候廷生も昨日まで學輩親友に圍まれて自由の境遇にありしが今は遠く蠻土に逐ひ込められて孤獨の身とふり常に天空を拜して故郷を懐ふの情切に候

金澤醫學會は紀元の佳節を卜して開會せられし由其宴會ありしや學會ありしやは御文面に見えざりしが何れにもせよ研學に熱心なる諸君相慕ひ智識の交換は殊に青年輩にまじりては有益にして嘸や分國の研究會等も旺盛に御座候はん篤學の部長殿、院長殿を始め高級醫官の御示導何れも益ふらざるはふし折角鋭鋒を向けらるゝが何より羨まし小官若任以來未だ日淺く唯周圍が奇異なる様に呆然たるのみ然れ共最近二旬の間に學びたる新智識は又多大に候大溪の清波に大鯉を流り、生蕃(阿冷社)の歡光に來れるに會し追次風土の奇異なるに馴化しつゝあり

當臺中には歩兵第三大隊の三ヶ中隊あるのみにて尙一ヶ中隊は山間僻地の浦里社に分遣し從て病院も臺北衛戍病院の分院あるのみにて臺灣府と稱し旅團司令部のありし頃即ち岡田博士等在勤せられし當時の試験器械も今や古び新道具とは更に無し君か言ふ臺灣のゴツホも之れには一服しておられる乍併臺灣ゴツホの意志々々貫徹せば他日世に公表する何等かのアルバイトが成功されむ乎

當地の狀況は小原軍醫殿克く御存知にて尙部長殿早瀬軍醫殿も御承知の答小生は過日來當地の衛生狀況を知らん爲め地方衛生を臺中廳警務課に兵營生活を探らん爲め大隊本部醫務室保存の古びたる帳簿を見讀し今や其一般を知れるが長宗我部長殿は旅團守備司令部附軍醫正として小原軍醫殿は當

(通信)

大隊附軍醫としての書類を見奉り貴管下の人慕はしく存候未だ當地軍醫團の景況等詳細に存せず候へば未だ金澤軍醫團へは何等の利益に在る記載致さず十全會よりは松原教授より當地よりの消息を知らせよとの希望もあれば疎遠なる男ありと存せらるゝかは知らざるも今暫し音信を見合せ歸地分團へ御報道可申に付軍醫部長病院長殿へ然様御鳳聲願度候

尤も會員として拙者より願ふべきものを先鞭打たれし心地致候二ヶ年生活の間には時々御通信致度考に御座候第一通信としては尙地方の醫事概況を御報知致さん(別冊をす)年併毎通信は小生が投筆にて綴るまゝ拙文補正を要する点に充分御訂正相成度候尙不要の物は御棄却相成候共又は軍醫團諸兄の御參考にもならば幸甚々々

當地衛成分病院には金澤に昨年おられし前田軍醫職せられ其病院長たる一等軍醫は石田寅三稱する人にて宛に角軍醫は三名あり然るに石田軍醫は今般轉任の身さふり隊務萬端は新參の小生獨り引受くる事と相成擔架教官迄命せられ候

歸地に於ては森山、春田軍醫殿は入れ代りせられし趣官報にて承知森山軍醫殿よりも來信せり何卒御序の折同軍醫其他の諸官へ宜敷御傳聲相成度候
不

臺中街概況

一、臺中街地勢及一般景況 (附土民ノ風俗)

(位置、北緯二四度九分、東經一二〇度四二分、海拔七八・四米突) 臺中街ハ廣漠タル平野中ニアル一市街ニシテ彰化ヲ距ル東北四里、臺北ノ南方四十里ノ處ニアリ戸數二千五百二十二(内地人戸一、一七八、五百二十三)(内地人三、一九八、本島人戸一、三四四、五百二十三)(本島人五、三二五、明治四十三年十二月盡日調)地勢ハ開潤ニシテ周圍ハ遠ク蛇々タル山脉ヲ望ミ其間一帯ノ水田沃野ナリ南端ハ開潤社街道ニシテ西端ハ彰化街道ニ通ス十一人ハ市街ノ北方ニ住居シ三々伍々各處ニ散在ス土地ハ高燥ニシテ街内ハ殆ト平等ナル地盤ヲ成シ南北二向ッ

テ傾斜ス

臺中街ノ概況ハ街ノ東方約五百米突ノ處ニ我第三大隊兵舎及臺中衛成分院アリ兵營ノ北ハ一帯ニ平地ニシテ野村練兵場ニ倍スル廣クニシ其中央ニ彈藥庫ノ一棟アリ此所ハ即チ練兵場ニシテ目下新兵教育ハ盛ニ行ハレツ、アリ此練兵場及兵營ト臺中街トノ間ハ臺中公園ニシテ其面積六園程モアラシ内ニ青苔ヲ布麗セル二ヶ所ノ丘阜アリ潭々タル蠶池ヲ控ヘ阜上ニ兒玉閣下ノ鑄像、舊代ノ饒閑登子蠶池ノ中央ニハ明媚ナル玉亭アリ通スルニ壯麗ナル橋ヲ以テス亭ハ一昨年鐵道開通式施行ノ際、閑院宮殿下ノ玉座ニ奉リシ所ニテ善美ヲ盡クス池平カニシテ鳧鴨浮没シ幽禽ノ沙野雲ノ搖曳皆鏡中ニ在リ唯憾ムラクハ之ニ映スル蒼翠ナキチ内地人ノ住ム街衢ハ清麗ニシテ列肆繁錯ノ通路二ツアリ一ハ大塚街一ハ新盛街ト謂フ然レモ本島人ノ住家ニ至リテハ未タ頗ル不潔ナルアリ茲ニ土人ノ家屋構造ニ就キ少シク詳記セシ家屋ハ其材料泥土及圓形石ト漆喰ヲ用ヒテ家屋ノ周圍ヲ繞ス概チ職屋式ニシテ二階ナリ其棟高一丈六尺乃至一丈二尺トス其方向一定ノ規則ナキカ如キモ東或ハ南ナリトス其原因未タ不明ナルモ西北方ハ忌ムト云フ床床面ハ上等ハ美麗ナル煉瓦其形六角乃至四角ナルモノヲ敷ケリ然リト雖寢臺ヲ設置セシ下ハ厚ク立派ナル板ヲ併列シテ濕氣ヲ避ク爲メナルガ如シ又下等ハ土間ニシテ更ニ敷物ナシ屋根ノ上等ハ煉瓦ヲ併列シ之ニ漆喰ニテ固メ裏面ハ多クノ材木ヲ用ヒ白色ニ塗布セリ而シテ室内光線射入ヲ要スル爲メ硝子ヲ嵌メタル小窓三四個ヲ備フルモノ多シトス下等屋ニ在テハ少量ノ材木ヲ用ヒ菅若クハ藁葺ニシテ小窓ヲ見ス又市街家屋ニ在テハ一般ニ其庇ヲ長フス壁ノ上等ハ緻密ナル煉瓦ヲ疊積ス其ノ厚サ凡ソ一尺五寸但シ其中心部ハ泥土ヲ充填セリ室ノ内部ハ多ク白色或ハ薄紫藍色漆喰ヲ厚ク塗布ス下等ハ只泥土ノミヲ用ヒ壁トス其厚サ一尺二寸余リナリ爾他ノ諸点ニ於テハ殆ント吾人ノモノト異ナラサルモ小部落ニ於テハ家畜動物(牛、水牛、鷄、鶩、山羊、豕、犬)及人尿ノ爲メニ惡臭ヲ放チ土地ノ不潔ナルコト甚ダシ

土人ハ多ク下等ノ労働者ニシテ男子ハ裸体又ハ薄衣ニシテ多クハ腰部及陰部ニ僅カノ衣布ヲ纏フノミ頭ニハ廣キ筒皮製ノ笠ヲ戴キ長キ竹製ノ烟管ヲ携ヘ全身皮膚日光ニ曝シ赤條々タリ頭髮ハ清國人ノ如ク編ミテ長ク後身ニ垂レ又ハ鉢巻ヲナス榮養ノ状態ハ全ク不長ニシテ停車場前ニ於テ乘客ヲ待ツ車夫數十人ヲ見ルモ一人トシテ腓腸筋ノ豐肉ノ形ヲ見ルナキヲ以テ知ルベシ然レモ彼等ノ終日ノ勤勞ハ日本ニ於テ多ク見ル程ナリ常ニ高調ノ音聲ヲ揚ゲテ饒舌躍ル所ナシ巳ニ幼少ノ頃ヨリ然ルガ如シ女子ハ老幼ヲ問ハス彩色セシ紙又ハ布片ヲ以テ製シタル大ナル花簪ヲ挿ム殊ニ赤色ヲ好ムモノ、如シ顔ニハ植物性白粉ヲ塗リ耳飾ヲナシ唇ニ紅ヲ点セシモノ數多アリ殆ント内地婦人ノ粧裝ニ於ケルト同一ニテ而モ巧ミナリ清國福建省ヨリ移住セル家系ノ婦人ハ足ノ小ナルヲ美トスルモ眞ノ土人及廣東地方ヨリ移住セル家系ノ婦人ハ足大ニシテ常ニ跣足ナリ

二、土人ノ起居

當地方ノ稍富有ナル家屋ハ廣大ニシテ其室數多キモノニ在テハ必ス數夫婦及之ニ屬スル子供澤山ニ居住スルハ一般ノ風習ナリ之レ多クハ親子兄弟姉妹等ノ家族トス尙其上流者ニ在テハ男女室ヲ區別ス夫婦間ニ在テモ亦然リト云フ幼年ナルモノハ男女ヲ論セス皆母ニ屬シテ同室ス、食事及炊事所、朝飯概テ午前八時ニシテ多クハ單純ナル白粥或ハ芋大根等入レタル粥ヲ喫シ紅茶或ハ白湯ヲ飲ム(但シ生水ハ決シテ口ニセサルカ如シ)又書食ハ午前十一時乃至十二時此食事ハ通例炊キタル米飯ニ副食物トシテ野菜或ハ肉類一二器ヲ添フ夕食ヲ以テ最も副食物ヲ撰ブガ如シ此ノ食事情況ヲ視察スルニ中等以上ハ家族一定ノ食室ニ集リ團欒シ稍滋食ニ富ム物品ヲ食スルモ下等社會ニ在テハ固ヨリ物品ヲ撰フ能ハス食事スルモ更ニ一定ノ場所ナク時トシテハ邸内路傍等ニ出テ食事スルコトアリ子供等ニ於テ殊ニ然リトス又漬物即チ香ノ物等ハ每食多少用ユルカ如シ炊事所ノ狀況ハ水流シノ備ヘナク甚タ亂雜不潔ヲ極メ器具多クハ整理セス例ヘハ一個ノ桶

或ハ一個ノ鉢アルトキハ清潔不潔ニ應用シ又拭布ノ如キモ茶碗ヲ拭ヒ其跡ニテ身体ヲ拭フ等更ニ清汚ニ頓着セズ其他手拭或ハ自身着衣ノ袖杯ニテ茶碗ヲ拭ヒ之ニ茶ヲ濯キ客ニ出ス等實ニ恐縮ノ外ナシ

業務及作業時間ハ生活ノ程度貧富及職業ニ依リ多少起居ニ亦差華アルヲ以テ悉ク之ヲ詳記スル能ハス但シ當地地方ニハ乞食非人ト稱スル程ノ貧困アルヲ見ズ而シテ今其ノ概況ヲ掲ケレハ男子ハ屋外事業上ニ就テ東西ニ奔走シ女子ハ家ニ在テ家事ヲ整理スルノ務メアルヲ通則トス例ヘハ男子ハ鐵ヲ屑ニシテ田畠ニ行キ或ハ市ニ行キテ日常必要ノ物品ヲ購ヒ來リ或ハ賣物ヲ携ヘテ市ニ行キ或ハ職工トナリ人夫トナル女子ハ家ニ在テ炊事ニ從事シ或ハ裁縫ヲナシ或ハ衣裳ヲ拵ヘ河流ニ至リ洗滌ヲナシ或ハ小兒ノ撫育及家畜飼養等殆ント内地ノ景況ニ異ルコトナキガ如シ又中等以上ノ生活ヲナス家ノ子供ハ漢書或ハ習字本ヲ携帶シ教讀師ノ居宅ニ學ビ又ハ臺灣公學校ニ就學教師ニハ日本人モアリ本島人モアリ概シテ當地方ノ少年ハ書字ヲ善クスルニハ感服スル所ナリ農家ノ作業時間ハ午前六時ヨリ十一時午後二時ヨリ六時迄トス然シテ午前十一時ヨリ午後二時迄ハ休憩時ニシテ多クハ喫烟シ午睡スル者アリ業務ニ出ルニ當リ辨當等ノ準備ナキガ如シ彼等ハ間食トシテ買食ヲナス實ニ單簡ナル生活ニシテ市場ノ飲食店ニ於テ頭ヲ列ベ行儀ヨク箸ヲトル様ハ奇觀ナリ彼等ハ一日ノ生活費僅々五錢内ニ於テ足ルト云フ故ニ雜役、労働者モ尙余裕ヲ存スルナリ又召使ヲ多ク有スル家ノ主人ハ定業ナク只邸内或ハ田圃ヲ見廻リ或ハ散步スルハ去ル休日ヲトシ臺中ヲ距ル約二里南方阿草霧社ナル部落ノ林家ヲ訪チたり林家ハ臺灣屈指ノ豪家ニテ彼ノ生活ハ尙王宮ニ似ス數棟ノ宏麗ナル居宅ヲ構ヘ召使ノ數幾百ヲ以テス彼ハ常ニ小作人、田地ノ景況ヲ巡視スルニ從僕ヲ率非年中間斷ナシト云フ其他土人一般ノ遊戯歡樂トシテ阿片ノ喫煙、賭博、飲酒、蓄妾ナリト云フ富有者ハ尙數妻ヲ有シ第一夫人第二夫人ノ順序アリト云フ阿片喫煙ハ本島人間ニ限り一定ノ場所ニ於テ許可セラレアルモ然ラサル喫煙者ハ頗ル罕例

ナルモノヲ煙用ス殊ニ生蕃ノモノハ然リ從ツテ彼等ノ眼病ニ罹ルモノ多キガ如シ

寢具及寢臺ニ就ク景況及睡眠時間 寢具トシテハ單筒ナル廣キ布片又ハ薄キ綿入蒲團又ハネルノ如キ織物ヲ用ヒ粗甲ノ蓆チ數物トナス入床ニ際シ脱衣セテ洗足セテ從テ頗ル汚染セリ而シテ就眠前ニ喫煙スルチ例トス睡眠時間ハ凡ソ八時乃至九時間ナリ然レモ中等以上ノ家族ニ於テハ多ク深更マテ談話シ或ハ遊藝ニ耽リ漸ク十二時乃至一時ニ至リ就眠ス

三、氣象

當地ハ北回歸綫下ニ近キモ盛夏ノ候炎暑ノ爲メニ甚タ苦惱スルガ如キコトナシト云フ予ハ渡臺尙日淺キチ以テ一年間ノ狀況ヲ述グル能ハサルモ日射力ハ劇甚ナルヲ覺ユ恰モレンズノ焦点下ニアル如ク皮膚ハ強ク刺戟セラレ發汗ノ僅進銳敏ナル如ク想ハル故ニ此際室カニ入レハ(建築ニモ依ル)忽チ清涼ナルヲ覺ユ目下氣溫ハ攝氏二〇度内外ニシテ夜間ハ冷涼ニシテ袷衣ヲ以テ尙寒冷ニ過ルノ感アリ降雨ハ實ニ稀ニシテ予ガ着任以來二旬間一面數分間ノ微雨アリシノミ空氣モ能ク乾燥シ臺北基隆地方トノ比ニアラズ予ハ玆ニ臺中測候所ヨリ得タル明治四十三年一月臺中氣象概況ヲ記サン

本月ノ前半ハ頗ル溫暖ニシテ恰モ三四月ノ如ク之ニ反シ後半ハ著シク寒冷ナリシ就中一月廿六日ノ朝ノ如キハ九州邊ニ異ナラサル寒氣ニシテ中央山脉ハ白雪ヲ戴クニ至レリ同日臺中附近ニハ結霜ヲ見サリシモ斗六邊ハ結霜ノ爲メ苗代蕃薯等ニ多少ノ被害アリシト云フ之ヲ要スルニ本月ハ寒暖ノ變化稍烈シク平均シテ半年ヨリ稍寒キ方ナリシ尙各氣象要素概ノ要ハ左ノ如シ

氣溫、平均一五度七(華氏六〇年三)ニシテ半年ヨリ〇度五(〇九度)低ク平均最高ハ二二度四(七二度三)ニシテ〇、六度(一、一度)高ク平均最低ハ一一度一(五二度〇)ニシテ一度一(二二度〇)低シ最高極ハ十一日ノ二九度三(八四度七)ニシテ一月ニ於テ斯ノ如キ高溫ハ甚タ稀ナリトス最

低極ハ廿六日ノ一度六(三四度九)ニシテ是レ亦稀ナル低度ニシテ三十四年二月十三日ノ氷点下一度〇(三〇度二)ニ亞クモノトス
濕度 平均ハ八三%ニシテ半年ヨリ二%多濕ナリシ

雨 降雨日數ハ九日ニシテ半年ヨリ一日多ク雨量ハ五五耗一ニシテ一〇耗二多カリシ

風 ハ北最も多ク平均速度ハ三米三(一時間七哩四)ニシテ半年ヨリ八%寡カリシ

各種日數 各日數ヲ半年ニ比スレハ快晴ノ七日ハ二日多ク曇天ノ八日ハ二日寡ナク濃霧ノ五日ハ二日多ク電雷ノ一日ハ過不足ナカリシ

四、水質

概シテ善長ニシテ湧出量モ頗ル多量ニシテ殆ント何地ノ井水モ飲料水ニ適ス其他諸所ニ平地ヲ破リ冷泉湧キ三四ノ小流トナリテ滾々ト流レ衣類ノ洗濯チナスニ大ニ便ナリ從來各井戸ノ化學的檢査成蹟ヲ見ルニ理學上全ク透明ニシテ無味無臭一立檢水中格魯兒ハ一〇密瓦以下有機質五、〇以下硝酸微量ナルモ亞硝酸アムモニアノ如キハ皆無ニシテ何水モ軟性ナリ

五、公所

臺中廳、郵便局、停車場、小學校、公學校、商工銀行、支金庫、博物館、監獄署、製糖會社、兵營等ハ内地人ノ建テタルモノニシテ何レモ比較的壯麗ナリ其他未ダ建築中ノ物數箇所アリ就中兵營ハ其敷地廣袤ニシテ堅牢ナル「ホワイトハウス」ニテ宏壯ナル「内地兵營」比ニアラス殊ニ當地ハ往年來麻刺利亞流行地タリシチ以テ兵舎ハ全部防蚊裝置ヲ施セリ病院トシテハ甯成分院ハ目下建築中ナルガ公立癩病院ハ規模稍廣大ナルモ外觀不完全ニテ病院ヲシクハ見エズ却テ臺中婦人病院其他四、五ノ開業醫ハ奇麗ナリ官吏ハ多ク内地人ナルモ尙相當ノ教育備ハレル本島人ニシテ公所ニ勤務スルモノ少カラズ警部補巡查補ハ本島人上リニシテ威張レル所アリ其他雜役ニ使ハル、土人甚ダ多シ

六、地方調辨材料

臺灣ノ大都市ハ廳ヨリ補助セル市場ヲ設ケアリ臺北ニアルモノモ臺中ニア
 ルモノモ市場トシテハ惜シイ程ノ建物ナリ種々ノ食品ハ終日販賣サレ頗ル
 盛ナリ鷺鳥、家鴨、鶏、雉、豚肉、牛肉、等ノ肉類、鯉、鮪、鱈、鱈、鱈、
 鯽、ボラ、其他干魚鹽着、野菜物トシテハ内地ニアルモノハ殆ント總テア
 ラサルハナシ果實類ニテハ「パイナップル」把蕉ノ實等アリ而モ何レモ其
 價格相場ハ内地ニ比シ廉ナリ此等ノモノハ日常吾人ノ口ニスル副食物材料
 タリ穀物ニ於テハ五穀ノ年々産出高ハ夥シク就中米ノ如キハ年二回ノ收穫
 ニシテ糯米ノ産額モ甚タ多キガ如シ然レモ臺灣米ハ澱泊ニシテ粘性ナク吾
 人ノ好ニ適セス故ニ予等ハ之ニ糯米ヲ混シ炊クトキハ充分食スルニ足ル臺灣
 ノ土ニ顔出シテ未ダ三旬ニ至ラヌ予ガ食膳ニ於テ充分臺灣米ノ一人前ヲ平
 グルヲ得兵士ハ臺灣米五、糯米、麥三ノ比ノ炊飯ヲ食シ而モ余ス所更ニナ
 シ現今精米ハ一升十錢半肉百目十四錢ナリ今ヤ交通機關具ハリ内地商店ト
 ノ交通頻繁ナルヲ以テ日用品衛生材料ハ比較的低廉ニテ購フヲ得然レモ建
 築材料タル材木伐石ノ如キハ比較的高價ナリ蓋シ此等中央ノ山脉ヨリ容易
 ニ求メ得ベキモノ之ガ運搬ノ不便ナルニハ當局者モ頗ル苦心セルモノ、如シ
 既ニ内地新紙上喧傳セル如ク中央山脉ヨリ蕃界ニ入りテハ森林鬱蒼トシ鑽
 脉速ナリ實ニ無盡藏ノ寶庫未ダ開鑛ノ運ニ至ラサルハ遺憾ナル事ナリトス
 七、病者ノ所置及傳染病ノ豫防

士人家族中病者アル時ハ頻リニ其全快ヲ神佛(毎戸ニ神靈アリ孔子ヲ祭ル
 モノ亦多シ)ニ祈願シ或ハ市街ノ藥舖ニ至リ其病狀ヲ述ヘ藥主ノ考案ニ依
 リ調劑シタルモノヲ買ヒ來リ之ヲ飲マシメ其他民間藥トシテ草根木皮ヲ用
 ユルノ他殆ト策ナキカ如シ又傳染病豫防トシテハ往時全クナカリシカ現今
 我官憲ニヨリ所斷サル然レモ地方部落ニ於テモ種痘ノ法ヲ行フノハ自今四
 十四年前和蘭人ヨリ傳習セシモノニテ日本ノ版圖ニ歸スルヤ眞ノ牛痘苗ヲ
 用非其前ハ入痘ヲ利用セシモノ、如シ是ニ附言ス近來台北地方ニハ痘瘡流

行シ嚴重ナル種痘ヲ實施シツ、アリ

土人モ疫病ニ對シテ醫療ヲ信スルニ至リ藥代ヲ拂フテ治ヲ請フモノ多キモ
 尙虎烈刺病ノ豫防ニ蒜ヲ嗜ミ身体ノ滋寄ナリトテ蛙ヲ食シ齒牙ノ健康ヲ保
 持スル爲檳榔子ノ實ニ精製石灰ヲ附シ之ヲ葉ニ卷キ常ニ嚼ムノ習慣アリ其
 他土人中皮膚病及眼病ノ甚ク多キヲ目撃ス漸次土人等ハ教化サレ醫師ノ本
 能ヲ頼ムニ至レルモ蕃族ニ於テハ疾病ノ祖先ノ神罰ナリトテ大ニ忌ムト云
 フ

八、台中ノ衛生狀況

左ニ台中醫院ニ於ケル昨年中ノ入院並外來彰患者數ヲ掲ゲン

(△印ハ外來)

病 類 別	内地人男	内地人女	本島人男	本島人女
傳 染 病	△三〇一	△二四八	△三四四	△一二〇
發育榮養器病	△一八二	△一九一	△三七四	△一〇一
皮 膚 筋 病	△一八四	△一九九	△一四〇	△四五三
骨 關 節 病	△二〇四	△二六五	△二六四	△七一
血 行 器 病	△七三	△七二	△五一	
神經系五管器病	△三四九	△二四〇	△四〇一	△八三
呼 吸 器 病	△二九九	△二四八	△三八一	△七六八
消 化 器 病	△三九二	△二九〇	△三七八	△一〇四
泌尿生殖器病	△三二六	△一六一	△二〇三	△二〇三

(通信)

外科病	△一二二	△一〇〇	△二六七	△三五九
中毒病	一一一	一一一	△一六五	△三
計	△一、四八七	△一、三八八	△二、〇〇〇	△二、〇〇〇
尚本島ニ於テ最モ注意スヘキ疾病ノ患者數ヲ掲クレハ左ノ如シ	△一、八二二	△一、四〇三	△二、〇一四	△二、〇〇〇
一、麻剌利亞新患者數	内地人男	内地人女	本島人男	本島人女
入院	九〇	三五	二一	二
外來	二六一	九七	二二二	四五
計	三五一	一三二	二四三	四七
二、脚氣新患者數	入院	六	一	一
外來	二〇	一	一	一
計	二六	一	一	一
三、花柳病新患者數	入院	一一	一四	一
外來	七七	二四	一〇六	一
計	八九	二八	一二〇	一
四、肺結核新患者數	入院	四	一九	二
外來	一三	一三	四八	八
計	二二	一	六七	一〇
五、阿片中毒新患者數	入院	一	一五	三
外來	一	一	一六	二

計 三一 五

以上ノ内死亡數ハ入院患者ニ於テ内地人男二九人同女一人本島人男七人同四人ニシテハ内地人男女各一人本島人男六人同廿二人ナリ其死亡ノ最モ高キハ消化器病ニシテ内地人男一人同女五人次ギハ傳染病ニシテ内地人男八人同女四人ニシテ之ニ次グハ呼吸器病ナリ而シテ花柳病ノ比較的少數ナルハ娼妓ハ婦人病院ノ治療ヲ受ケ一般患者亦タ多クハ開業醫ノ診察ヲ受ケテ病院ノ診察ヲ厭フ結果ニ依ルモノ、如シ

九、本島有名ノ麻剌利亞熱ニ就テハ予ガ渡臺日尙淺ク未ダ多數ノ患者ニ遭遇セサルニ依リ經驗ヲ記スルコト克ハス尙詳細ノ記事ハ後日ノ報告ニ譲リ只其見聞ヲ少シク記シテ參考トナス

當廳管内ノ麻剌利亞熱患者ハ全島ニ於テ多數ヲ占メ年々ノ統計上亦頗ル多キヲ認ム左ニ最近五ケ年間ニ於ケル當廳支管各區ノ病院、醫院、公醫等ヨリ報告シ來レル麻剌利亞患者ノ合計ヲ占サン

年 次 臺中廳管内總人員 麻剌利亞熱患者數

明治三十八年度 三八七、一六一 八、三〇二

同 三十九年度 四四八、三四一 九、三八六

同 四十年 度 五三三、一六八 一四、五九六

同 四十一年 度 五三四、二二九 一〇、五五六

同 四十二年 度 五四一、三九二 八、七九

總人員ハ管内ニ於ケル日本人及土人ヲ合計セシモノニシテ下ニ掲ケル患者モ同ジ區域内ニ生シタルモノナリ臺中廳所管支廠ハ左記ノ所ナリ

大甲、東勢角、葫蘆墩、砂漚、彰化異林、鹿港、北港、北斗、二林、臺中直轄

土人ハ本病ニハ必ス罹ルモノト常ニ覺悟シ恐怖ノ意ナシ其發症モ亦輕症ニシテ重症ハ甚々稀レナルカ如シ然レモ内地人ノ之ニ罹ル時ハ屢々重症ニ陷

り終ニ死ニ至ルコトアリ而シテ本病ハ歳ニヨリ病者ノ員數ニ著シク其増減
 ナ來シ又年内多少ノ消長アリト雖ヒ全ク絶ユルト云フ時ナシ殊ニ例年七八
 九月頃ニ在テハ最も多シ且ツ之ニ罹ルハ男女ノ別ナシト雖モ年齡ハ二十才
 乃至三十才ノ壯年者ニ多ク老人小兒ニ少シ職業ニ就テハ農者ニ多ク商人ニ
 少シ家屋構造ニハ濕氣ノ他著シキ等差ナキモ居室ノ不潔ハ興テ力アルカ如
 シ風ノ方向風力等ハ關係少キカ如キモ雨ハ大ニ關係有ス殊ニ降雨長キニ
 亘リ快晴シタル後ハ必ス其病者頗ニ多數ヲ出ス物トス又平素酒ヲ好ム者ニ
 多ク阿片ヲ喫スル者ニ少シ而シテ本病ニ罹ル場合ヲ年長ノ土人ニ就テ尋問
 セシニ其原因種々アリト雖ヒ最も多ク感スルノ二三ヲ記スレハ遠足申騷兩
 ニ逢ヒ衣服濕潤トナリ再ビ炎熱ノ日光ニ曝サルノ時(但シ雨ニ逢フハ土
 人最も恐ル、カ如シ)及夜露ヲ侵シテ旅行シ又ハ露臥等ナリ而シテ土人ノ
 此病ニ罹リテ其最モ常用スル處ノ藥品ハ白色金鷄臘霜ト稱スルモノニテ舶
 來ナリト云フ之レ或ハ燒規成分アルナラン

要スルニ土人ハ未ダ尙吾人ノ感冒ニ對スル原因ヲ想フ如クニ全ク不明ニ屬
 セリ彼等ハ蚊族ノ害アルヲ確信セザルナリ蚊ニ喰ハレルコトヲ敢テ願ミズ
 脾ノ腫大セルヲ常トシ全ク麻刺利亞ニ對スル措置ヲ思ハサルヲ奇トス然レ
 ハ目今本病ノ豫防徹底ハ當低望ムベカラズ

十、陸軍麻刺利亞豫防措置

予ハ麻刺利亞病ガ我兵員ヲ害セン程度ヲ詳細ニ報告スベキ時機ナラズ然レ
 厄往年ノ被害甚シキニヨリ銳意之ガ豫防手段ヲ講ゼルハ今更ノ事ナラサル
 モ特ニ今回ハ規尼涅ノ強制服用ヲ實施スルニ至リシハ麻刺利亞ガ尙慘害ヲ
 逞クセントセルヲ防ギ一面ニハ當局者ガ如何ニ之ガ豫防實策ニ務ムカチ示
 スモノナリ多發スル本島守備部隊ノ爲メニ年八千圓ヲ投シテ其結果ヲ見ン
 トシツ、アリ

抑モ本島陸軍各部隊内ノ麻刺利亞豫防ハ夙クヨリ各種ノ調査ヲ行フト共ニ
 守備隊兵舎ニ種々ナル防蚊手段ヲ實行シ數年前ニ比シ頗ル患者數ヲ減シ一

(通信)

面ニハ漸次惡症尠クナリテ何レモ治療日數ノ短縮シタルハ事實ナルガ尙本
 年二月一日ヨリハ麻刺利亞絶對豫防ノ目的ヲ以テ規尼涅ノ強制服用ヲ實行
 シツ、アリ其方法ハ各隊ノ兵員四日毎ニ均規〇、七五(〇、二五五)錠三
 箇)グラムヲ服用セシム本法ハ死モ角本年一ケ年ヲ通シテ其ノ成績如何ヲ
 見ルナリ中央部ニ於テハ今日ニ比シ一層罹病數ヲ減シ得ル心算ナリト今三
 十年以來ノ調査ニ付麻刺利亞漸減ノ狀態ヲ見シガ爲メニ守備隊員ノ麻刺利
 亞患者ヲ人員一千人ニ比シタル比例ヲ年別ニ示セハ左ノ如シ

三十年	二、六六九、五	三十一年	二、四二七、〇
三十二年	二、二九六、五	三十三年	三、三三三
三十四年	一、七一一、八	三十五年	一、一一四、三
三十六年	四五一、八	三十七、八年ハ戰役中ニ付畧ス	
三十九年	二八〇、三	四十年	五一三、一
四十一年	四九二、八	四十二年	五九九、九

前表ヲ見レハ三十五年以前ハ全兵員一人ニ付一箇年間ニ必ス一度以上麻刺
 利亞ニ罹リツ、アリタルモノガ近時ニ至リテハ二ケ年ニ付一人一度ノ罹病
 割合トナルニ至レリ今又之ヲ守備隊配置ノ各地方ニ觀察スレハ各地何レモ
 年ヲ經ルニ從ヒ罹病數ヲ減シ病質ヲ輕カラシメタル現象ニシテ現今ニ方テ
 未ダ比較的多數ノ感アルハ東海岸方面ナルモノ之レトモ數年前ニ比スレハ
 無論減少シタル譯ニテ今後同地方ノ開發ト共ニ衛生上佳良トナルベキハ自
 然ノ數ニテ是レ亦期年ナラス充分ナル効果ヲ示シ得ベシトイフ即チ各地方
 別ニ從來ノ麻刺利亞患者比例ヲ三段ニ摘記スベシ(兵員每千ニ付患者)

地名	三十年	三十五年	四十二年
臺北	七八五、五	五七六、七	三一七、七
宜蘭	二、一四四、一	二四五、三	九〇、七
大嵙崁	四五八、五	一三九、〇	あ、し
臺中	四、〇九九、八	一、八四三、七	四七一、三

(通信)

埔里社	四、七一九、八	一、五四五、〇	二六七、一
斗六	五、二三五、二	一、四八六、六	六八二、一
臺南	二、四八二、四	六六五、四	四二七、三
蕃薯寮	二、八七九、〇	七二九、五	一五五、三
鳳山	三、一四〇、九	一、五九七、五	九八五、一
恒春	一、二一一、九	守備隊ナシ	七二一、八
卑南	二、七五六、八	六九五、七	二、七三四、九
璞石閣	四、七五六、八	ふ	一、四三五、二
花蓮港	五、二八一、一	ふ	一、六五五、八
基隆	二、七九六、九	四七九、〇	四六一、九
澎湖	三四六、七	ふ	一一二、〇

本表ニ就テ見レハ三十年ヨリ六ヶ年ノ三十五年ニハ著シキ減少ヲ見更ニ七
年後ノ四十二年ニハ其數ノ頗ル減シタルヲ見ルヘシ唯特ニ臺南ニ在リテハ
例令病症悪性ナラズ又治療日數尠シトハ云ヘ昨年ニ於テ比較的多數ノ患者
ヲ出シタルハ惜ムベク其原因トシテハ曾テ數年間守備兵ヲ撤シタル後近時
新ニ配置シタル爲メニ外ナラザルベシト云フ

十一、理蕃ノ狀況、臺灣產物ニ就イテハ次回報スル所アラン (終)

●東京在學同窓會

團山樓小僧

袖のすれあふも他生の縁さかや、なもへば吾等のかつては尾山城の片ほと
り瀧然として登ゆる母校に朝ふ夕ふ級を同じくし學びの途にいそしみしも
の、いって因縁のおからめやは、幸にも恩愛深き師父の薫育を蒙りて四ヶ
年の課業を滞りなく、前途多大の希望を抱いて喜び勇みつ今は西に東に思
ひ〜に菓立ちぬ、爾る後事の志に順ふるはあれ、はた逆なるはあれ、春
夏秋冬、時來りぬれば遙に想を兼六の梅、卯辰の雪に寄するに共に、また

心をふつかしき師や親しき友の身の上に運ばてやはある、
然り母校と云て同級といふまへ既に我等が胸中、温かき情景の湧きいづる
ものあるを、かつて嘗草會てふ一團體のもとに一致結合したりし兄弟の、
今や六年ふりにて再會の機を得たるに至りては吾等の感觸いかばかりや
あゝいかばかりや、

時はこれ文月の二十七日梅花正に馥郁たるの頃所は麴町九段階社内、お
江戸の半面を一瞬の下に集め得るの室、人は現に在京せる左記の五名

- 一、陸軍醫學校病理化學專攻 山本 幹 雄
- 一、全 外科專攻(永樂堂病院派遣) 速 水 昇
- 一、横濱在住 福山 可 藏
- 一、醫科大學病理教室 小 原 芳 雄
- 一、本郷區臺町二〇、坂本方(遊學) 高 伊 三 郎

今日のあたり相あふては脊廣や軍服に装ひこそ異かれ尙むかしの姿忍はれ
つ古を語り新を談し、それからそれと感觸眞に極みなく、快興いつ果つべ
くも見むざりき、同時に遠く住ひせる會友井上只次、種子田秀吉、朝倉重
敏、下村義二郎、池田良吉、中西吉郎等の諸士に紀念のよせ書を送りぬ
あゝそれ實に六年前雜誌の抄讀や、小野慈善院の救療に、行を同ふせし會
友の恐らく最終の寄り合なるならん、あゝ又それ吾等今後再び得かたき快
舉ふるらん。

附 記

三月十二日、在學の軍醫連主催にて、同窓生の集合ありしが、こは蓋し所
謂一圓會なるもの合併すべかりしもの也、詳しくは別に人ありて報告す
るふるべし
三月十六日、乾一夫君久しく駿河臺井上病院にて眼科を研究し給ひしを良
縁ありて信濃共濟病院まで、速水昇君の令父が主宰せらるる病院へ部長と
して赴任し給ふために、送別の宴を開きぬ、

●梅岡幸二氏の通信

(伊藤哲一氏宛)

梅岡氏は伊藤氏と共に同級中の俊才今や一身を國家に捧げて陸軍三等軍醫とあり夫れく任地に精勵して日々幾多の患者を診療せらるゝ傍斯學の研鑽に餘念なくと云ふ、爾氏共明治四十一年度卒業生たり

先達では御手紙を難有ふツイ忙しいため返事をおくれかしたカンニンく兄には益々壯かりて何より結構です正月には訪れたいと思ふたが何だかわかり悪くそうふ所だし時日もふかつたから失敬した濟みませんよ薄情な男だと思はれるだらうがまーカンニンしてくれ給へよ以後注意するから研究かんで中々六ヶ敷ひもんだ然し吉澤氏からも聞ひたが君の元氣なのは敬服するより外は、僕は君の様な友を持つを光榮として居る、香くは自愛してくれ給へ僕は鈍い頭でボンヤリして目を送つて居るイマにどうあるか……心細い者だア先達で高級軍醫と法醫學的解剖に行つた面白かつた是には一寸得る所があつた次便に詳しく。

●宮村誠哲一郎氏通信

(富山衛成病院 附三等軍醫)

(伊藤哲一氏宛)

拜復貴翰雖有拜見仕り候御治驗御示し被下御厚情千萬奉謝候小生は凍傷には一%クレソール石鹼液温浴一日三回、「トraham」には毎常搦把潰瘍には時として亞鉛華時として格魯兒亞鉛にて刺戟致しザリチル酸「ワセリン」貼用致居り候御示しの御治驗も試み可申候(申略)就而は文献沸底にて閉口仕り候レーセルの講義多少得る所有之へきか、存候此程到着致候若し御望に候へば暫く位御送附可申候餘は後便に讓り可申候

●長井運男氏の通信

(編輯部宛)

(通信)

拜啓嚴寒の候會員諸君益々御多詳御勉學の段奉賀候不肖相變らず頑健に勤務罷在候へば乍他事御安慮被下度候左に當地の消息端情仕り候

本船の役務は關東門沿海及び北清警備にして昨十一月廿六日着任致し候艦種は通報艦艦歴は日露役中露國東洋艦隊に屬し二十七速快船を以て奮闘し流石の日本男子をして心膽を寒からしめ旅順を遁逃して浦鹽艦隊に合つせんとして樺太に於て轟沈せられ勇敢なるノビーグの名聲も最後まで金ふせるものに御座候引揚後日本式に義裝せられ以前の面影を失し候乗員は艦長以下二百四十三名衛生部員は軍醫長大軍醫一、乘組中軍醫一、看護手一看護二の定員に候受診患者は四五―八名位にして普通船團部隊定員一割以上比すれば異數の好成績と存じ候捕獲船に多きチフス襲來を受けざるは幸福に候去るに際し花柳病豫防に付きては大に懸念致候も着後未だに一名の罹病患者を出さず軍港地に於けるより好況を呈し居り候全く賣笑婦に對する檢査の嚴格より來る結果にして夫に快感を得候(關東洲滿洲内地共齷齪婦共檢査實行致し居り候)當地に於ける醫學的集會は旅順醫學集團會と稱し陸海軍醫市内開業七名の醫師より成り小生は十二月中旬都督府醫院に開催の節初めて出席團練たる會合にして有益なる出演も有之候本院は露時代赤十字病院にして役後二十万金を投じ都督府に譲り受けたるもの由院長は陸軍一等軍醫正本堂恒次郎頭目學位を得られたる醫學の士院內總受客患者は四十名位温室の設けあり設備完備し居る由聞き及び候も會日散會黄昏さふり未だに參觀の機を逸し居り候中々信用厚く支那土人の來るものも多き由何れ詳見の上御報可致し余り冗文に涉り候へば之れにて擲筆仕り候終りに諸君の健康を祈る

●萩野茂次郎氏通信

(舞鶴海兵團附 海軍少軍醫)

(福田美明氏宛)

大兄益御健康御研鑽の由奉大賀候此間には御はがきを以て朋輩の動靜を御知

らせ被下有難深く奉感謝候小生此頃は新兵練習艦天龍に乗組近海ふる敦賀宮津小流ふるへ航海致し甚だ多忙を極め居り候儘詳報は後日に御譲らせ被下度候 后昇

●丹羽直氏の通信 (中村欣一郎氏宛)

拜啓本年は 陸下より新年の雪と云ふ勸題を恵まられしだけありてか寒中より寒あきになりて寒く豊年の微も近く時々發現御地なども白雪暈々ふんごの報もありましたが當地では時々日光風に混じて非々として來たるには一寸困却先日も面白き御手紙難有感謝二月十五日御投函の御手紙は十七日朝まだき確に落學拜誦御親切様に詳細御教示御手数を掛け難有ふ御陰様で漸次機を見て着手致ししよう到底物にふらさるは勿論と御見捨て置き下さい大兄は益々御壯健で本年は昨年の反動が一層御活動の由大慶々々小生も貴局齋居時代と異なり無責任のホラも吹けず閉口呵々、本春は此所彼所にて何々同郷會何々縣人會ふんと盛んに騒ぎ廻り小生等もつい傳染したか昨秋來の提議たりし同窓親睦會を集め親しき話して温かい飯でも食ふ様に仕様でふいかこの話は忽ち纏り即ち去る一月廿九日六時走せ集る連中は塚本富老(眼科主任)高野宗重(耳鼻主任)瀧澤忠一郎(藥局長)佐々木茂樹(渡邊病院)鈴木琢磨(軍醫)關根平(志願兵)の諸君と小生加ふるに松浦前教授にも特に臨席の榮を得たので一段の光榮してた場所は小「ストラ」主義か主義だけに「ヤア失敬!!!」「ヤア暫ラク」ふごヤアにも金澤の「アクセント」が残つて居るまで打興じ漸時に種々ある閑話が出た其内に關根志願兵と鈴木軍醫を中心として兵營生活で話しが煮けた關根氏の談話は當日第一の好愛嬌であつた生來快活なる氏は談話中同期卒業生の鈴木軍醫へも常に「鈴木軍醫殿ニハ斯ク〜デアリマス」(兩氏は然も同隊の中)と特に「左様であります」の返答で皆ふが思はず哄笑せる様か有様です尙ほ特筆すべきは

關根氏の双頬に蓄へたる美鬚で一見關羽とかの如うて英姿颯々たるもの兵卒にて煩鬚を蓄へるものは聯隊中無慮一名五十五のひげと稱せば關根志願兵の代名詞の如く就中頗る振つたるは同氏の鬚が聯隊の將校會議に登り兵卒の蓄鬚云々の問題とふりし事ありと母校には元來騎人に乏しからず氏も又一騎人話し進んで御馳走も進み八名で五十數冊の洋食をベロリと嘗め腹を撫して胸式呼吸の練習盡きぬ話して次回を約して九時散會致しました母校出身の片割れが斯くして一夕を樂んで居るのです佐々木恩師林大兄其他諸兄にもよろしく頼みます左様なら

* * * * *

校内雜報

●弓術部射初式 (二月十一日)

明治四十三庚戌の年紀元の佳節を下し、我が弓術部は射初式を、本校濟々堂に於て舉行せり。當日は、高安校長を始め、山崎、金子、村上、松原、石川、阿部の諸教授の出席あり、非常の賑況ありき。尙ほ出技者の氏名左の如し

角田眞一、大島時、延川靖、山田彦十郎、小原他吉、佐木武雄、伊藤磨他雄、長登喜男、末岡愛二、石川寛治、奥泉藤次郎、千田登、奥山義盛、近藤時男、八島先生、

弓術射初式の順序は、只口授のみにては備忘に乏しき故に、八島先生の教に依り、左に其の順序を略述す。

備て、吉田流には之れを次第巻藁と云ふ、次第は弓矢持出で射仕舞ふ迄の式を謂ふなり、舊時は新年武術初めに行ひし故射始とも云ひたり。

此の順序は弓矢を右手に持ち左手は垂れ腿の前へ掌を接し、進退するなり、弓は拇指中指の三本にて鞞革より二つ伏せ（一つ伏せ二つ伏せは指の擴徑あり）置き、矢摺藤の所を弦を下にして持ち、矢は角木の所を無名指と小指の二つにて持つ、然し二つの指では落ち易き故、中指に少し掛る程角の先きを出して差支へふし、然し余り長く出すときに弦に掛る故に程よく懸ふべし、弓の持ち工合は手を下げ生得の儘とし、其持様は腕を張れば体の中心を上弭が越す様になり、又体に寄り過ぎるを威勢を損するに至る、故に右の足の中心へ上弭の行く程にするを自から手の開き工合も宜くなる此の体さ手との距離には定まりたる寸法あり、而して上弭は疊より六七寸程透くを宜しとす、併し之れば中背の人を主としたるものなり、故に脊の高下に依り適宜之れに準して宜し。

夫れより式場入口にて軽く一禮をなす、此時弓の上弭が疊に付かざる様ならず、又余り上り過ぎるを見苦きものあり、右禮終りて左の足より立ち、射所即弓の上弭の巻藁臺の疊摺の木に接せんとする所まで往き、左の足の爪先きを正面に向け、体を正面に向けんとする時、眼は弓鉞の上を左より右を視る（總て眼は常に九尺斗の處を見、又所作ある時は其所作る所に付くる方よし、假令掛けを懸くる時は矢の筈を見、手の内を取る時は弭を見るの類あり）其れより右の足を右の方へ少し引き、而して左の足を少し後方に引く、之れと同時に鉞を起し、眼は正面に向け、左の膝を下につけ右の膝を浮かべて蹲踞す、斯の如くせしときは巻藁と射所との間合が弓一狀にある、而して蹲踞せし夕所は巻藁の中墨より少し後方にあり。是れより先づ弓、次に弦、次に巻藁の矢坪を視、夫れより左の手にて着衣

襟を寛るげ、腋より先きに肩を脱ぎ、袖を能く後方へ遠り、兩乳の見ゆる程に左右の襟を巻き込み、弓を身の中心まで出だし、左の手に弦を手の甲の方にふる様右の手の上より取り、右の手に膝の上に矢筈の上る様置き、弦を返し矢の甲乙を見分け、甲矢を番へ、筈先を持ちて繰出すと同時に弓を左の膝頭を越したる處まで出し、筈を一文字に掛け右の二つの指にて矢を前にする様に襟先きを押さへ、巻藁の矢坪即ち中墨より二寸斗後方の處を能く見定め、之れに右足の拇指を當て立ち、足踏け、手の内、弓構と手前の書の條目に依り常の如く射弦納まつて「ヤア」と弓聲を掛け、右足より寄せ元の如く蹲踞す、此時右手は膝の上に甲矢の時の如く置き、弓を身の中心に持出し弦を反し乙矢番ひ前の如くす、但し矢坪は巻藁の中墨へ射、聲を掛け右の足を寄する時、弓を身の中心にて右の手に取り、左の足を少し後方に引き元の如く蹲踞し、袖を前に出し左の手を右の懷へ入れ、肘より先きに肩を入れ弓の弦を左の手の甲の方にし、上弭の高くなる様渡すと同時に巻藁の方に向き、兩膝をつき襟を正し、左の足より立ちて巻藁の前に往き左の手にて弓を少し伏す様巻藁を押へ、但し巻藁と身との間四寸程明け、左の膝をつき右の膝を立て矢束に踏開き、先づ甲矢を二手程程に抜き、捻し藁にて角木の手の内に成る様にし矢の筈を下けて左の膝頭一杯に置き、乙矢を前の如く抜き甲矢と一集にすると同時に右の膝を伏せ、弓も膝頭まで卸し右の手に持替へ、体を越して右の方へ回すと同時に巻藁を後方にし、右足より立ちて元の射所にて重く一禮し、右の足より立ちて勝手に入るなり。

以上は次第巻藁の順序の概略あり、此次第巻藁に就ては弓の張堅め、弦の仕懸け、鞞革の巻替へ、矢の手入、射前に就ても亦弦を切り、矢を落し、弓を落し、或は巻藁を射突きたる等の異變ありし時、替弓、替矢の受渡等、作法心得方も有り、然し爰には前に述べん手前書の條目を擧げ、余は他日に譲る

吉田流弓手前ノ條々

- 一、次第ノ一
- 一、卷裏眞ノ胴ノ一
- 一、腕口ノ一
- 一、紅葉重ノ一
- 一、打起ノ一
- 一、息合ノ一
- 一、強弱ノ一
- 一、約束ノ一
- 一、骨合筋道ノ一
- 一、矢筋見様ノ一
- 一、梨割ノ一
- 一、五月雨ノ一
- 一、弓聲掛處ノ一
- 一、三ツ物射揃ノ一
- 一、足踏ノ一
- 一、弓構ノ一
- 一、懸三段ノ一
- 一、手ノ内ノ一
- 一、テラヒノ一
- 一、弦道ノ一
- 一、村雨ノ一
- 一、付ノ一
- 一、中り拳ノ一
- 一、張合ノ一
- 一、朝嵐ノ一
- 一、離ノ一
- 一、弦始中終納ノ一

(弓術部委員記)

柔道部記事

(二月二十七日)

ビュービューと哮る醫王山嵐が、膚を裂く様な晩も足の高下駄一步一歩埋て人通りが途絶へた様ふ雪の夕も御飯が濟むま直ぐに袴の裾を絡げ上げて指して行く先は濟々堂。早速素裸にあつて粗末な稽古衣を着て一本稽古するま玉あす汗がだらだら流れる、斯んふ荒行が三十日て寒稽古皆勤賞が頂ける身分にかり三月の大會を待ち兼ねて勇ましい活劇を演ずるま云ふので寒稽古の首尾を完ふしたのである

考へて見るま寒い晩には亦相當に歌骨牌などの室内遊戯もあつてよかる一

爐に寄りて勉強するものは尙よろし然も自ら好てこんふ野蠻ふことをあすもの毎夜五十人六十人もあるのは何だか腕が鳴て出なければ三寸の蟲が承知しふいためだ、醫學校の書生さんま云ふと見るからに青白い弱々しい人がある敢て勸告はしふいが野蠻柔道でもやつて見給へ申々面白いものだよ

寒稽古皆出席氏名 (順序不同)

北村裕壽	池上豐	村上錦六
北野榮藏	長外喜男	藤田研二
小幡一志	西川他見男	的場貞行
伊藤忠一	山岸勘吉	鳥居環
西野勝茂	森田耕一	畑田慎之
田中吉左衛門	井上源造	井土又吉
佐竹仁三	坂井貞準	田原利崇
山角彙晏	小山角次郎	松田喜作
末岡愛一	篠岡真作	鈴木仁吉
谷量太	岡村重武	大村作太郎
木村武夫	石川義助	田邊鼎介
西岡半三	高山園造	岡本晃
島豐吉	中島茂一郎	橋本正雄

柔道大會

どうしても懦弱にかり易い醫學校てかやうな盛大なる柔道大會が催されたまは尙心強い感しがする。會は二月廿七日雪花のちらちらに舞ふに拘らず高安會長石川部長宮田教授を始め諸先生諸先輩の空席あきまてに臨席を辱ふし二百有餘の來會者ありて濟々堂場俚氣溢るま云ふべき有様で然も禮儀正しく武術の會合さて靜肅に午前九時半より藤森吉田両氏審判の下で仕合を始め小ふるも大ふるも肥にたるも瘦せたるも拙きも巧ふるも今日を晴れと戦ふので手に汗すること幾度。だんだん進んで對外仕合せあると

(校内雜報)

一本勝負終りて寒稽古皆勤證書及進級證書授與式を行ふ

御影藤太郎

岡部千太郎

右両氏が三ヶ年間劍道寒稽古皆勤せられしにより金メダルを賞與せり

皆勤者氏名

御影藤太郎

大武 國治 池上 豊

北村清太郎

岡部千太郎

根布 貞吉

館 昌次 辻 金二

寛永 義長

吉田 一郎

末岡 愛一

佐道 進 砂川 茂男

谷 量太

中島儀一郎

岡本 晃

村山 夏平 脇屋 誠義

大村作太郎

鈴木 仁吉

木村 武夫

後岡 良作 岡村 重武

太田 潔

江龍 彦一

長 外喜男

橋本 正雄 西野 勝藏

西田 半三

井上 源藏

東 義雄

齋藤 金則 武長 壽雄

石川 元良

岡部 忠清

進級者氏名

二級に昇進せしもの、

岡部千太郎

館 昌次

武長 壽雄

三級に昇進せしもの、

辻 金二

根布 貞吉

森田 次郎

四級に昇進せしもの、

北野 榮藏

穴田 留八

森田 次郎

五級に昇進せしもの、

窪田 他作

佐藤 進

末岡 愛一

吉田 一郎

砂川 茂男

太田 潔

西野 勝藏

水野 一傳

流 右 銀 左 銀 の 形

館 昌 二

岡部 千太郎

本校の形

池 上 豊

岡部 千太郎

池 上 豊

本形は館、辻兩氏の十八番とするものにて水野一傳流の形中至難さふすも

の手足の敏捷ふる動作を要し劍道に熟達するものにあらざれば爲し得ず本

校の形は爾來之を以て我が校獨得の形さふし以後毎年劍道大會には必ず此

形を行ふものより本形は氣を以て敵を壓するにありて劍道の奥儀に達せる

ものからざれば習得するを得ず日夜宮川師範の指南、岡部、池上兩氏の苦

心遂に我校に此形あるに至る

三本勝負 ○は面、△は胴、●は小手、▲は突、×は分

六

高は第四高等學校、一中は第一中學校、二中は第二中學校、商は商業學校、歩七は歩兵第七聯隊、歩三五は歩兵第三十五聯隊、監は監獄、警は警察署、外は市内の劍客

- (谷) 量太
- (末) 岡 愛一
- (西) 岡 半三
- (古) 谷 菊男
- (林) 松次郎
- (森) 田 次郎
- (笹) 田 龍雄
- (北) 村 清太郎
- (奥) 村 謙二
- (岩) 田 外松
- (鳥) 豊喜
- (福) 島 他十郎
- (北) 野 榮藏
- (高) 黒岩 某
- (寛) 永 義長
- (村) 本 武
- (大) 武 國治
- (西) 川 濤
- (岡) 部 千太郎
- (廣) 瀬 正信
- (鈴) 水 仁吉
- (橋) 本 正雄
- (生) 橋 一郎
- (西) 川 他見雄
- (西) 野 宗之
- (太) 田 潔
- (池) 上 豊
- (長) 岡 某
- (穴) 田 留八
- (岩) 本 常吉
- (鹿) 野 源作
- (武) 長 壽雄
- (村) 木 武
- (五) 十 廣一
- (福) 島 一 郎
- (池) 上 一 見
- (北) 村 清太郎
- (谷) 澤 外 茂 樹
- (會) 田 米三郎
- (長) 谷 川 信
- (岡) 部 千太郎
- (西) 野 宗之
- (石) 川 元良
- (齊) 藤 金則
- (小) 原 他吉
- (窪) 田 他作
- (米) 村 作太郎
- (吉) 田 一 郎
- (吉) 野 清勝
- (北) 野 榮藏
- (西) 野 清一
- (窪) 田 他作
- (高) 村 金春
- (窪) 田 他作
- (高) 野 清
- (黒) 瀬 外 吉
- (岡) 部 忠清
- (永) 田 榮作
- (北) 村 清太郎
- (池) 上 豊
- (館) 昌 二
- (根) 布 貞吉
- (廣) 瀬 光家
- (箱) 枝 薫

△(加藤)末吉
△(外)渡邊兵四郎
○(高)稻部千太郎
△(高)稻葉一也
△(高)山田卓爾
△(高)田島榮吉

△(根)末吉
△(中)中孝茂
△(高)中村泰八
○(會)田米三郎
○(高)田島榮吉

△(北)村清太郎
△(高)吉岡重頼
○(加)藤末吉
△(高)泊武泊

選手一本勝負五人拔勝者

渡邊兵四郎 稻葉一也

步三五林と萩原 萩原氏は元氣旺盛我校剛の者林氏の突出す鋒先如何ふる金城鉄壁も砕けむものやある萩原氏能く之を凌ぎ一手元に打入り面も振らず續き様に拜打ち敵もさるもの一足飛びすさりさま突き出す手續甲打ては乙突き遂に引分け

步三五長岡と池上 池上氏は柔劍共に奥儀に達したる勇士、苦も無く敵の手に打ち入り銃鎗を奪掠し敵を唐竹割にすること二度而して敵に勝を讓る其襟度大あるか否

小中杉本と池上 杉本氏は小松中學の大將其突それしも場後ふくつまづき倒れ池上氏の敗は頗る殘念

步七鶴と箱 鶴氏は七聯隊中錚々たる劍士、箱氏の打込みは我校中能く之を防ぐものなし箱氏無二無三に打込みて勝は美事

四高田島と曾田 曾田氏は我が校中第一の手者能く彼れに敵するもの誰れかあらん曾田氏の勝は當然

一中西川氏と大武 大武氏は竹太刀を取つては校中其右に出づるものなし真劍ならば敵は眞二つ

四高泊と加藤 加藤氏は達人何ぞ能く彼れに敵せんや渡邊と加藤 是れ當日勝負中の勝負龍虎の闘とは實に是れ渡邊氏は市内

第一の劍士甲胸を切れば乙面を打ち乙小手を断ては甲突き遂に引分け

時正に日暮高山部長閉會の挨拶を述べられ満場立禮し日本の盛會は爰に終を告げぬ (劍道部委員記)

四年級々會記事 (三月五日)

世には生者必滅會者常離といふ常套語がある、これは大體徹底してゐない俗人が離れるのは厭だ別れるのは厭だ駄々をこれる者の爲めに興へられた一つの緩和劑である、泣く兒に含ませ乳房である、吾々四年級は爰數ヶ月で互ひに相離れるの時期に達してゐる自分の心を顧みんと誠に寂しい、互ひの交友に於て心が硬變し辛い罪のさい暮しをした學校生活を去ると云ふ心が寂しい、人間が容易く世活に壓きて來た時自分等が昔し握み合ひ歪み合ふて居た時代が戀しくかつて現實が如何にも寂しい過去が如何にも愉快なものさかつて見ゆる、それと同じ事て學校を去つて後にそれを慰ふる戀しいものであるのだ、今吾々はこの愉快の泉源たる境地を去らればからぬさ思ふさ寂しくある、自分は會者常離の乳房には含み得ぬ泣きたければ泣いて心の寂しみを満たしたのである、だがしかし物には表裏がある得失がある唯泣いたのでは人世の意義が通らぬ、前途の大なる義務を思ふさ女々しい心は起りぬ大に前途を祝福して己れの天分を盡さなければならぬ、その祝福の筈を張るを要するそれが遊別の意を兼ねた級會の起る一原因であらう、

吾々の級會は三月五日に開かれた、北國と云ふさ直ちに雪さいふ連想が起る北國に雪は降りものである、しかし雪も文明と伴ふて進歩するさ見えてだん／＼精巧にかつて人間の邪魔をさかすかつたさいふのがこの金澤の近頃の評判である、それでも他郷から來た吾等にはさあからぬものと思はれる、雪の日に道を行く人は足駄の齒の三つ四つ見つけぬ事があいのでも行路難が分かるぬかるみを歩くさ腹が

立つ、しかし又雪の幸は大ひにある、かの遠つ峰を望んで白皚々の雄姿に浩然の氣を養ふ事が出来る、峰越の山は窮蹙たる美姬が銀の衣を挑けて立てるが如くその美に魅せられるこゝもある、萬葉の雪花を咲かした晨の景は洵に辭勃たる詩趣を喚び起すのである、これがこの北國の幸である三月五日は雪が降つてゐた、

加越の山は眞白だ、下卑も眞白だ、樹も眞白だ、道行の人の傘の上も衣の上も眞白である、自分もこの雪の中を定刻の二時半をいふのに金谷箱につく、「我物と思へば輕し傘の雪」といふた其角は其の感興の極が五官を鈍らせたのであらうが詩に御縁の遠い自分には積つた雪は重たい、重たくあつた傘を支關に叩くとパツと散つた雪が白い圓を畫く、下足を取つて上つて見るさ人數の大部分は集つてゐる、自分はこの時一種の氣に打たれた、それは春さ云ふ氣である、野の幸を下に見てふわり／＼と浮いてゐる蝴蝶のやうな氣である、奥へ通つて見るさ同好の士で歌留多遊びが初まつてゐた銀練の士が互ひに運ぶ眼線の電光の如く閃めくことに一驚を喫した此時自分は熟練は人を驚くべき進境に迄達せしむる事の眞理を發明した

開會の時刻は來た吾々春の兒は一堂の下に集まつた、堂々たる男子がズラリと居並んだ所は壯觀だこれが自分の息子でこの百人からの親父であつたらどんかに愉快だらうかと思ふ、この点に至つては校長先生を羨むのである、互ひの和氣は暖爐のそれよりも暖かである、會場は階下の一室長い一室に二列の食卓は長く百餘の息子が此れに居並んだ突き當りには演壇が設けられた室内の裝飾などは眼を引くべきものはない、美を盡し技を凝したものは一つもない机上の果菓さいへ書生的である、斯る物質的美は予々の求むる所では無くて精神的美にあるのだ、互ひの和合を期するのである互ひに觀樂を別つてゐるのである

開會を待つ間に雜談が彼方此方に初まる笑ふ聲歡ぶ聲此が相合して一つの雜音が室内に盈ちた、しかし雜音は吾等が日常開く所の病的雜音、かの

吾人の心を痛ましたる雜音さいふ類ではなくては、この雜音が耳底に響いてはかの天籟の清爽たるが如くに清き心の共鳴を起して茲に一つの心的狀態を造る、此れ塞に各にの心に浮いた清き心の標示として表はれたその聲、それを受けたその心の弦糸は清き共鳴を起して快といふ情緒を引き起したのであるさいふ事がわかる、自分もこの歡樂に浮かされつゝ窓外に視線を向けるさ雪は猶降つてゐる方形の窓框を舞臺に躍る雪が面白い、……………「後の雪はさーきーに、先きの雪はあーきーに、」とさき／＼舞ふて纏れて解けて纏れる雪、風の靡子に誘はれてちよつさかわした雪、外れた雪がきりりと舞ふて先きに進む、かつ追ひかつ追はれつゝ降りたる雪は實に面白い……………と見てゐると開會さいふ松原先生田中先生は見はられた、午後三時十五分開會

矢吹君は簡單に本會の主意を述べ且つ先生の來臨を謝して壇を下るさ次いで馬詰君が上つた、氏は郷國の四國のある所の話をAとBとCとて説明した、高安校長が見えられた……………演壇はこれから振ふ、

第一に高安先生に一場の講演を請ふて快諾せられ先生は例もの溫容を以つて笑を湛へて諄々と語られた、其は今般先生が発見せられたる克巳の三定義であつた、その譬喩の巧妙さうの口調の溫雅な所に魅せられて克巳のこの新定義を熱心に聞いた、……………宮田佐々木両先生が見はられた、次いで立たれたのは松原先生である、先生は前題の克巳に就いての話を前提として大略次の如く語られた……………「人は克巳の必要あると共に自信力を最も必要とする、かの「子グロ」の如きは自信力に乏しく人間たる已れの尊き事を思はず自個を捨て奴隷に身を委してしかも恬然たり、人間須らく自信力を保ちて彼れが如き徹を踏むべからず、又日本商人は所謂町人根性ありて品性なしと其れを駁し、人は已れの人格を尊ぶべきである事を戒め、且又人の爲す已れの能はざる事はあがるべききてふ精神を以つて進まざるべからず、事前に辟易するの愚者を戒められたり、即ち人間は自信

力を以つて大ひに進むべし、近來人間の勇氣は退歩しつゝありこの消息は精神病者にも目暗し得る所にして昔日の精神病者には病室の鏡俤を挫きたるてふ豪の者ありしが今はかゝる者は無し、これに依り見る時は人間の勇氣は月と共ニ減し年と共に退きつゝある事を知る、されば今の人大ひに勇を鼓して進むべきである、……さ大ひに吾々に興奮劑を興へられた、近來人間の意氣は大ひに萎靡しつゝある、其が精神病者に迄表はれてゐるのが面白い、昔物語に出て來る關東武士は緋緘の鎧、鉄形の甲に弓箭を被ひ大刀を佩いて戰陣に向つた。所が今の人間にそんな物を背負はせやうものなら忍ろアタクチツシエル、ガングが起る、背蕚に銃でも猶重いのである、うれだけ人が孱弱にあつたさいふは文明のお庇である、文明は吾人に此れもすふ彼れもすふと皆文明がして呉れる、その結果が弱い人間さあつたその文明が造つた弱い人間を又文明が造つた醫學が救ふ事にある、天下は廻り持ちである。

次に級長佐々木先生の開業學の講義があつた、吾々は母校を去つて温い先生の膝下から去つて世の波に漂ふ小松とあるのである、この門出に當つて慈悲ある先生は吾々の前途を憂ひ一つの舵を興へられた、其が開業學の講義である、此れに依つて吾々だけが驚愕たる事を免かれる事が出来るのである、實に興味を以つて聞いた夫は先生に請ふて別項に全文を載せる事とした一時間に亘る先生の講話は拍手の裡に終りを告げ茲に諸先生と卓を共にして食事に移る。

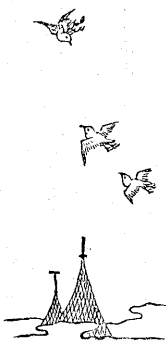
這般の會には音楽は一つも無い、學友の秘藏の藝比べも無い、薩摩琵琶の一曲に燃ゆる青年の意氣を感じるものも無い、講談に腹の皮の繕れるものもあつた、だが此等の代價を爲すべきものは多々あつた、榮華は夢か幻かの如く一時の享樂も亦た夢か幻かの如くで其等は唯我等の頭腦をサツと通る一つの快感で夫は丁度青空を去來する白雲のやうに消え失せてしまふ、かゝる形式的美を得るよりも更に深大なる印象を興ふる所の諸先生の

(内地雜報)

講話は其の代價の主なるものであつた、又五ひが得たる一種の感想不言の妙味これ而已で充分足りる、斯る形式的快は要求しきいのである、會食は五時前に初まつた其壯觀は又格別だ幹生諸君(矢吹北川吉川中村與山馬詰の諸君)は眼の廻るほど奔走せられた事を大ひに多きするので大ひに苦勞千萬であつた、……一皿を平げ又一皿、數皿は立所に盡して未だ足りぬと訴ふる者もあつた、この時は全く小供の心に返つた、芳醇の薫するものは勿論あつたが吾々が酔へるが如き心の満足を得て雪の日も黄昏るゝ頃各々歸途についた。

この蝴蝶の如く輕快にあつた花の如く美はしく玉の如く渾く泉の如く清くあつた心を以つて歸つた吾々の愉快はどんなであつたらう、其快は各の心に各々が味へはよいのである、自分が結んだ今夜の夢の物語は………蝴蝶は飛んで天國へ行つた、天國にはエンゼルがゐて美樂を奏して蝴蝶の舞をまふてゐた、………この後の歡樂は人に分ちたく無い、人々もかうであつたらう、各々胸奥に秘した愉快に訴へたいのである

四年級の級會は三月五日雪の日を以つて終つた………ア、三月五日………三月五日………この月とこの日は深く我が胸にひそんで最後の級會を偲ぶべく永遠に存する事であらう。(蒼江生記す)



内地雜報

ドクトル問題

近頃騒しき獨乙の「ドクトル」の資格問題に就きて「ドクトル」會より左の如く本會へ檄を寄せたり

拜啓陳ば兼て御承知之通駐獨日本大使珍田男が日本留學生の獨逸ドクトル試験を受けんとする者に與ふる資格証明の方針を變更し單に帝國醫科大學醫科大學卒業者にのみ証明を與へ從來久しく証明を與へ來りし醫學專門學校出身者を除外したるは其當を得たるものにあらざるを以て我東京獨逸ドクトル會は之れに反對し大使として從來の方針を執らしめんが爲め先づ別紙建言書を外務大臣文部大臣帝國大學東京醫科大學長及び駐獨日本大使に提出致し候右は事見會員の利害に關する重大事件に付き貴會に於てもそれ御高見も被爲在候事と信し候ば御參考迄に右建言書寫貴覽に供し度如此御座候早々頓首

明治四十三年三月十一日

東京獨逸ドクトル會總代

- ドクトル 山 谷 徳 五 郎
- マヂチーネ
- ドクトル 淺 田 繁 太 郎
- マヂチーネ
- 醫學博士 金 杉 英 五 郎
- マヂチーネ

建 言 書

(寫)

獨逸ノ學位「ドクトル、マヂチーネ」ヲ領有スル醫學博士楠順次郎外四十六人ヲ代表セル下名等ハ謹テ賢明ナル外務大臣伯爵小村壽太郎閣下ニ日本人ノ獨逸「ドクトル」試験受験資格證明ニ關シ駐獨日本大使珍田男ノ執ラントスル方針ニ就キ建言ス

一、少クモ獨逸ノ「レアルギムナジユム」程度ノ豫備教育ヲ受ケシ

コト

二、以上ノ豫備教育ヲ受ケタル後獨逸國ニ於ケルト略同様ナル完備セル

本國ノ醫科大學ニ於テ九學期以上醫學諸科ヲ修メタルコト

ノ二資格ノ証明ハ從來久ク駐獨日本公使又ハ大使ガ受験者ノ要求スル毎ニ會テ日本ニ於テ一定ノ學校ヲ卒業セシ者ニ限りテ授與シ來レリ所ナリ然ルニ駐獨日本大使珍田男ハ近來獨逸ニ於テ「ドクトル」試験ヲ受クル者ノ中學力劣等ニシテ獨逸大學教授ノ非難ヲ受クル者アリトノ理由ヲ以テ從來ノ證明方針ヲ一變シ帝國醫科大學以外ノ醫學校ノ卒業者ニハ一切該證明書ヲ下附セザルコト、ナシタリ

抑駐獨日本公使若シクハ大使ガ多年執り來レリシ獨逸「ドクトル」試験受験資格ノ方針ハ明治三十三年及ビ明治四十年ノ二回ニ時ノ駐獨日本公使若シクハ大使ガ外務省ニ稟議シ外務省ハ之ヲ文部省ニ文部省ハ更ニ之ヲ東京帝國大學醫科大學ニ諮詢シテ決定セラレシモノニシテ醫學專門學校令ニ依リテ設立シタル官公及ヒ私立ノ醫學專門學校ノ卒業生及ビ其他ノ醫師ニシテ東京帝國大學醫科大學撰科ニ在學セシモノハ獨逸醫科大學ガ「ドクトル」試験ヲ受ケントスル者ニ要望スル前記ニテ條ノ資格ニ適合スルモノト認定セラレ爾來十余年間毫モ滯滞ナク公使若シクハ大使ノ証明ヲ得テ受験シ來ヅリモノタリ然ルニ今珍田大使ガ突如トシテ此証明ノ方針ヲ變シ從來証明ノ恩典ニ浴シ、是等醫學校卒業者ヲ証明セザルコト、ナシ、ハ事實ニ於テ日本人ノ獨逸「ドクトル」試験受験ヲ根絶スルモノ

ニシテ其結果ハ今日獨逸ニ留學セル又ハ留學セントシツ、アル多數留學生ヲシテ多年抱懷セル志望ヲ抛ツノ止ムヲ得サルニ至ラシメ爲メニ彼等ヲシテ修學ノ方針ヲ誤ラシムルモノニシテ本邦醫學ノ進歩上甚ダ遺憾トスル所ナレバ速ニ珍田大使ヲシテ新方針ヲ改メ曩ニ貴省ニ稟議ノ上決定セシ方針ニ遵ヒ依然專門學校令ニ依リ設立シタル醫學校ノ卒業生及ヒ其他ノ醫師ニシテ東京帝國大學醫科大學醫科ニ在學セシ者ヲモ有資格者トシテ証明セシメラレンコトヲ本邦醫學ノ爲メ冀望ニ堪ヘズ茲ニ謹テ建言仕候恐惶謹言

明治四十三年三月 日

東京獨逸ドクトル會總代

- ドクトル 山谷 德 治 郎
- メヂチー子 淺 田 繁 太 郎
- ドクトル 醫學博士 金 杉 英 五 郎
- メヂチー子

外務大臣伯爵小村壽太郎殿

尙ほ文部省より醫學專門學校へ左の如く布達ありたり

官專一三號

本邦留學生ニシテ獨逸國大學へ入學セントスル者ハ從來單ニ本邦ニ於テ獨逸國「レアルギムナジウム」ニ相當スル普通教育ヲ受ケタル旨ノ證明書ヲ該大學へ提出シ入學後一二學期聽講ノ上ハ直ニ「ドクトル」試験ヲ受ケルコトヲ許サレ居候處近來ニ至リ醫科「ドクトル」試験ニ應セントスル本邦留學生ハ前掲學歴ノ外本國ノ完備セル醫科大學 (Medizinische Fakultät) ニ於テ獨逸國大學所定ノ年限間同國大學ノ科程ト畧ホ同一ノ學科ヲ修了シタル證明書ヲ要スルニ至リ夫ガ爲メ醫學專門學校並ニ其他

(内地雜誌)

醫學校出身ニシテ「ドクトル」試験ニ應セントスル者ハ其在學セル學校ガ獨逸國大學ニ相當タル旨ノ證明書ヲ要スルコト、相成リ右證明方ヲ在獨逸本邦大使ニ願出候者有之候ヘドモ本邦ノ大使ニ於テハ帝國大學醫科以外ノ醫學校ヲ以テ前記ノ如キ獨逸國大學ノ要學スル Medizinische Fakultätト認メ難キニ依リ證明書ハ之ヲ下附セサル趣ニ有之候就テハ此輩ニシテ「ドクトル」試験ヲ受ケント欲スル者ハ更ニ獨逸國學生ト同様ニ一定ノ修業年限ヲ經過セサル可ラサル事情ニ立至リタル趣ニ有之候元來右受験資格ノ條件ハ近頃特ニ規定シタルモノニアラスシテ別紙同試験規則譯文ノ通前以前ヨリ大學受験資格中ニ明記シアルモノニ有之只從來同國大學ニ於テ特ニ寛大ノ措置ヲ採リ一二學期在學ノ後ハ直ニ「ドクトル」試験受験ヲ差許サレタル處近來本邦帝國大學醫科大學以外ノ出身ニシテ獨逸國ニ留學スル者更ニ專門ノ研究ヲナスノ意ナク殊ニ未タ醫學ノ素養不充分ニシテ意思ノ發表スラ爲シ得ザルニ係ハラズ已ニ該試験ニ應ズル者少ナカラザル爲メ其成績ノ不良ナルハ勿論之ガ爲メ今回受験資格ヲ嚴重ニ檢査スルノ傾向ヲ生シタル由ニ有之候前述ノ如ク受験手續ノ嚴重ニナリタル事情ヲ知ラズ從前通りノ心算ニ依リ受験ノ目的ヲ以テ漫然渡航ノ後非常ノ困難ヲ感スルニ至レルモノ往々有之趣今般外務大臣ヨリ通知有之候ニ付テハ貴校出身者ニシテ將來同國留學希望ノ者ニ對シテハ可然御注意相成度旨明治四十三年三月二十三日文部省專門學務局長ヨリ金澤醫學專門學校校長宛通知アリ

ドクトル試験規則抜萃 (柏林大學)

第三章外國人ニ關スル規定

- 第一項 外國人ニシテ獨逸國醫術開業免狀ヲ有スル者ニ就テハ同資格ヲ有スル獨逸人ト同一ノ規定ヲ適用ス
- 第二項 外國人ニシテ獨逸國醫術開業免狀ヲ有セサル者ハ左ノ各項ヲ證明スルヲ要ス

一、受験者所屬國ニ於テドクトル試験ト醫術開業試験ノ爲メ必要ナル豫備教育ヲ受ケタルコト

此資格ヲ欠クトキハ少ナクトモ獨乙國「レアルギムナジウム」程度ノ教育アル証明書(必要アリト認ムル場合ニハ本國ニ於ケル証明書ヲ添付セシムルコトアルベシ)

二、以上ノ豫備教育ヲ受ケタル後獨乙國ニ於ケルト畧ホ同様ナル完備セル醫科大學ニ於テ九學期(一學期ハ半年トス)以上醫學諸科修メ尙一學期以上當大學ニ在學シタルコト

プレスラウ、エールランゲン其他ノ大學ニ於テモ右ハ殆ント同一ノ規定アリ

●「ドクトル」になる法 *Wie erlangt man die Würde?*

「ドクトル」の學位を得るには全ジ獨逸國中でも大學によつて難易の相違あれも今一二の大學に就而其規則を見るに次の如し

エールランゲン大學 Erlangen.

ドクトル學位の候補者は其時の分科大學長 Dekan に就て次の書類を添へて「ドクトル」學位請求書を差出すべし。

第一、高等學校卒業證書又は之と同等の普通教育を経たるの證明

第二、規則正しく少くも三年間醫學を研究したるの證明

第三、候補者自身に醫學自然科學上の主旨 (ein medizinischnaturwissenschaftliches Thema) に一著作したる科學的論文 (wissenschaftliche Abhandlung) 且つ其論文の候補者自身の手に成りたることの宣誓書を添附す

論文 (die Dissertation) 佳良と認められたる場合には口頭試験 (die mündliche Prüfung) を許さる、口頭試験に二様あり。

甲、獨逸の醫術開業免許試験 (die medizinische Approbationsprüfung) に及第したるものには簡略口頭試験を行ふ。

乙、其他のものには精細なる試験を行ふ。

候補者は通過したる論文を自費を以て印刷するの義務あり、表紙の裏面には當該分科大學の賛成を得て上梓したる旨を印刷し且つ報告者自身の姓名を記すべし。

候補者は「ドクトル」學位授與料として (für die Verleihung des Doktorgrades) 三百マルクを又論文百五十部を分科大學に納むべし、及第せざる時は納金の半額を再び拂戻さるべし。

フライブルグ大學 Freiburg

獨逸帝國臣民には高等學校卒業證書 (Maturitätszeugnis) 或は四年間獨逸語の大學にて醫學を修めたる證明書を提出したるものにはドクトル試験を允許す。

外國人には當該分科大學が獨逸の高等學校と同等以上と認めたる學校の卒業證書と獨逸大學と全等の學校にて四年間醫學を修めたる證明書を以て足れりとす、外國人は其他公署の調製したる身元證明書 (der Lehnhandschein) を差出すを要す。

候補者は書面を以て分科大學長「ドクトル」學位下附願 (das Gesuch) を差出すべし、この願書には一、履歷書 (Curriculum vitae) 二、必要なる證書類三、論文 (die Inauguraldissertation) 但し論文提出免除のもの此限に非ず四、書記長よりの試験料受取書 (die Quittung) を添附すべし。試験は論文と口頭試験とより成る、候補者既に價値ある著述をふしたるべきは分科大學は論文試験を免除することあるべし。

論文通過せば口頭試験に召喚せらるべし、口頭試験には獨逸語を用ふ、試験科目は一、解剖、二、生理、三、病理總論病理解剖、四、内科、五、外科、六、産科婦人科、七、精神病學、八、眼科、藥劑學毒學、十、衛生

是れあり。

候補者已に開業免許醫なるときは前記諸科目中少くとも三科目の試験を行はるべし、若し開業にあらざるときは少くとも六科目の試験を受く可きものとす、但し初の三科目は必ず試験さるべく他の三科目は受験者の選に任ず、然れども候補者は前記の總べての學科を試験さるべしとあるべし。

試験及第者は自費を以て論文を印刷し其表紙の裏面に報告者及學長の姓名を記すべし、論文は遅くも口頭試験後一ヶ年内に百二十部を調製し書記長に差出すべし試験料 (dai Gebühren) は三百マルクとす、候補者口頭試験を許されざる場合には二百マルクを返付し及第せざるときは百マルクを返すべし。

因に獨逸醫科大學總計二十即ち Berlin, Bonn, Breslau, Erlangen, Freiburg, Gießen, Göttingen, Grottswald, Halle, Heidelberg, Jena, Kiel, Königsberg, Leipzig, Marburg, München, Rostock, Straszburg, Tübingen, Würzburg. 是れ等にて皆大同小異の規則なれば之を畧す。
(Von Zeitschrift fuer Deutsche Sprache No. 10. J. g. XI)

●本會員ノ第三回日本醫學會ニ於ケル演題

- 第一部(解剖)
 - カハール方法ニ於ケル一二ノ注意 金子治 郎氏
 - 自家考案ノ注射器 石川喜 直氏
 - 筋肉附着區印像法 同 氏
 - 自製ノ人體内臟實寫型 同 氏
 - 「チニヒヨグクテルス」ノ水晶体 岡島敬 治氏
 - 日本産大鯛魚ノ脊髓膜 島田吉三 郎氏

第參部(病理)

○標本供覽

第四部(内科)
○悪性貧血病原論 附標本供覽

第五部(外科)
○直腸脱ニ對スル直腸固定法

○一ノ簡易ナル手術法(豫報)

○「コロ、フォルム」死

第七部(産婦人科)
○北國婦人ノ月經

第八部(小兒科)
○複雜ナル所見ヲ呈セル陰唇象皮性肥厚症ノ一例

第九部(消化器)
○米粉營養兒ニ來ル病的變狀

第十部(精神神經科)
○十二指腸小鈎虫病ノ口唇斑ト瓜筋ノ變化

○胃液分泌ニ對スル鑛泉作用ノ試験的研究

第十部(精神神經科)
○神經原纖維(宿題報告)

○鬱憂病ノ本態

○中樞性顔面神經麻痺ノ三例

○三日目毎ニ發作セル脊髄癆性幻學病ノ一例

- 村上庄 太氏
- 佐々木 達氏
- 木村孝 藏氏
- 飯森益太郎氏
- 鬼頭 英氏
- 岡本京太郎氏
- 田中正 鐸氏
- 佐々木 達氏
- 松原三 郎氏
- 同 氏
- 同 氏
- 同 氏
- 松王敷 男氏
- 北 豐 吉氏
- 吉田幡 誠氏

人事

●高山教授

今回金澤病院薬局部長を兼任せらる

●坪田本照氏

昨年卒業の氏は今回富山監獄醫を拜命せられたり

●早瀬三求氏

の不幸、氏の令息は去月中旬突然逝去せられたりと掌中の玉を奪れし氏の意中や察するに餘りありと云ふべし。

●伊藤精一氏

昨年卒業后山崎教授の下に内科研究中の所今回金城病院内科へ轉任

●山崎、佐々木、村上、宮田、鬼頭、石川、松原の諸教授

は日本醫學會第三回總會出席の爲め去月末上坂本月上旬歸授せられたり

●田中一次郎氏、林篤氏

の二氏も同上

●月岡勝次氏

(四十一年度卒業)眼科醫員勤務の所今回職を辭し郷里越後の國に於て開業の由

●高木琢磨氏

(四十年年度卒業)富田外科に醫員として永々在勤の所去月七尾病院外科主任として轉任せらる

●石坂直次郎氏

福岡京都大學等を歴訪せられ去月歸澤開業順備をふし上京東大の氣脈を伺ひ近々中旬開業の由尙ほ時々松任へ出張さるゝ

●佐竹清吉氏

(明治四十一年卒業)金澤病院婦人科に永々研究の氏は今回辭職郷里越中魚津町に於て開業されたり頭腦明快技術敏速の氏の如何に郷人をして信頼せしむるか察するに餘りあり

●影山清美氏

卒業后病理學助手として研究今回内科第一部醫員拜命せらる

●石川精一氏

去月廿一日附を以て神經科醫員を拜命同時に研究生を退學せらる

●岡忍氏

外科第二部醫員の氏は今回副手を囑託せらる

●高見義郎氏

願に依り婦人科副手囑託を解かる、聞く氏は近々婦人科醫員を辭し郷里に於て多年研鑽の達腕を振るゝ管と

●山田有登氏

昨冬卒業の全氏は高木琢磨氏の後任として今回金澤病院外科副醫員に任せられたり

●池田菱吉氏

全氏は去二月生理學教室副手を辭し新潟縣監獄醫に任命せられたり

●吉田宗一氏

全氏は金澤監獄の監獄醫を辭し石川縣の衛生技手に任命せられまとして縣下の「トラホーム」の豫防衛生に従事せらるゝことゝふれり

●石森國臣氏の留學

全氏は明治三十一年本校醫學部を卒業して村上教授の下に助手として病理學教室に勤務し次て福井縣の檢疫醫官として檢疫に従事し後ち京都醫科大學の生理學教授天谷千松氏に師事して生理學を専攻し次て名古屋市の愛知醫學專門學校の生理學教諭に任ぜられ致々研究と教育とに従事せられつゝありしが此度全愛知醫學學校より獨逸國留學を命せられ全校内科學教諭高橋傳吾氏と共に去る四月二日神戸出帆の宮崎丸にて渡歐の途に上られたり吾人は此少壯有爲の本校出身者が留學の壯行を祝し且つ其健康を祈りて止まざるゝ

●因に全愛知醫學學校にては當時校長熊谷孝之輔氏が外科學研究の爲め目下獨乙にありて未だ歸校せざるに今又た石森氏と高橋氏との二教諭に留學を命ト尙ほ全校皮膚梅毒科教諭楠太氏も自費にて前二氏と全船して留學の途に上れり又全校は今年度より學校と病院との新築に着手する筈なり云ふ

中京醫學の發展亦た盛かりと云ふべし

○宮川昌平氏 (四十二年卒業) 四月十五日より能美郡河北村字中島にて開業せらる

○濱地藤太郎氏 (三十七年度卒業) 私立七尾病院在勤の所去月十九日辭任直に京都醫科大學耳鼻咽喉科教室に再勤せらる篤學の程敬慕すべきなり。

○石橋四郎氏 (三十七年度卒業の氏は) 今面秋田市仲龜ノ丁上町九佐々木方へ轉居

○下平教授、松久祐馬氏、小山田基氏、日野信次氏、岡田盛吉氏 (陸軍一等軍醫にして陸軍省より留學外科研究の方にして本會員に非ざる方あり) の諸氏は四月三日獨逸キムンヘンにて外科學會列席の折一堂に會して席上のヨセ書を本會會員宛にて送られたり茲に會員に代り諸君の健康を祈るゝ共に御厚志を謝し申候

○佐竹秀一氏 昨冬卒業の氏は今面月岡氏の後を享け眼科醫員を任命せられたり

○渡邊宗一郎氏 昨冬卒業の氏は上田教授の下に研學の傍 渡野川病院にて實地研究中の處今回更に池田氏の後を襲ひ第四高等學校校醫を任命せられたり



(漫錄)

漫錄

醫術開業學 (四年級々會講話)

佐々木 達

醫術の開業は從來師の指導の下にありたる者が獨立して社會に出て已得の醫術を社會に應用せんとするに在り故に開業學は社會學の一種にして醫術的社會學と云ふを可ならん
凡て入さして社會に立たんとするには社會の信用を得るゝ最も必要にして殊に貴重の生命を一任せらるべき醫者に於て最も必要なり故に醫師を以て社會に立たんとするには此信用を博すべき方法を講ぜざるべからず
實際從來の開業醫は極力此信用を博する点に勉むるが如し其方法の正否は第二の問題として或は膨大なる廣告を試むるものあり或は壯大なる家屋に住居し或は身分相當の美服を飾り甚しきに至りては自家信用の大なること即ち來診患者の多數なることを装はんが爲め夥多の古下駄を買い集めて支那に陳列するものあり或は停車場の車夫に金錢若くは物品を贈りて患者を引き込ましむるものあり或は徒に他の診斷を否認し他を傷けて自家信用の材料に供せんとするものあり其手段の卑劣あることは言語全斷あり然れども又一方より顧みれば其信用收得法に勉むることは實に至れり盡せり云ひて可あり
然るに斯くの如き方法手段は元來信用を博する手段に非ず猥りに自家のみ収入を増加せんとする餓鬼道に均しき方法に過ぎず然も尙ほ詐偽的手段あること多し故に一時誤て信用を得るが如きことあるも其假性信用は長く

持續するものに非ず反つて遂に自ら不信用を招くことを知らざる患者の手段あり

余の開業學を斯くの如きものを云ふに非ず信用を博する点に至りては一ふりき雖ども其方法手段に至りて全く其趣を異にするものとす

余の信用を博せんとする方法は眞正の醫術的方法にして之れを約言すれば疾病の診斷を正しくし豫後を明にし治療法を誤らざるに在り既に此三者が完備せば社會の醫術的信用は自然に起り一旦取得したる信用は決して失ふことなきのみならず其信用は益々増加するものあり、この三者實行に就いては已に開業免狀を得たる者は相當の知識を有せざる可からず然るに實際に臨みては理論と一致するものに非ず其實行は容易なるものに非ず、故に此の三者の實行に就て少しく所見を述べんとす、

一 診斷、病名は必ず第一診に於て定むること

病名が定まらざれば治療を施さざることを勿論也然るに第一診に於ては病名を定め得ること少ふからず況んや實地に熟せざる時期に於てをや、此不明の病名を定むることの容易ならざること勿論あり、然れども此病名決定は醫術上の本務たることは勿論のこと實地研究の階梯たることを忘る可からず醫學卒業の直後は特に病的診斷に興味あり、會得したる新知識の應用に熱中して一直線に進行するものあり、故に割合に病名は容易に定まるものあり然れども少しく實地界に入り學理と實地の必らずしも一致するものにあらざることを會得するに至れば診斷は益困難とさるものとす、例之心窩部の腫瘍を以て胃癌と診斷せしも其位置は最も多き幽門部に存在せず反つて左側に位し膨滿試験に由て其腫瘤の部位を始めて証明することあり咳嗽胸痛熱發を以て肋膜炎と診斷せしものか肺炎とすることあり、黃疸熱發を以て肝臟病と診斷せしものが肺炎とすることあり、著明なる神經症狀を以て神經衰弱症と診斷せしものが肺結核若くは糠尿病なることあり斯の如き機會多々あるべし即ちこの時期が極めて大切なる時期なり此時期に

於て第一診に少くも確と診斷の方針を定めざれば遂に病名を定むること能はずして終ること多し

吾國古來の醫者は其日誌に處方投藥のみを記し病名を記せざりしものあり故に現今に於ても病床日記を處方録と云ふものあり若し第一診に於て診斷の方針を定めざれば遂に病名は不明に終り病床日誌は單に投藥處方のみを記し所謂處方録と云ふ一つも病名を見るべきものなきに至るものとす余嘗て或る私立病院に雇聘せられしことあり其所謂處方録なるものを見るに僅かに投藥處方のみを記入し一つも病名の記するものなき如何にして再來患者の病名を知るや問へば其處方に由て之れを知ることを云ふ即ち吐根の處方あれば咳嗽ある患者あることを知り重曹苦丁の處方あれば胃病患者たることを知り鉄劑の處方あれば貧血患者あることを知ることを云ふ豈に驚かざるを得んや、斯くの如くにして幸に治癒するものなきにあらずと雖ども甚だ危険なる治療法と云はざる可からず是れ單に對症療法に過ぎずして診斷を定めざる証あり、換言すれば小成に安じ大計を誤まるの弊害を知らざるものあり、

斯くの如き違法誤解は遂に非醫者に迄も蔓延し甚だしきに至りては 天皇の大權の下に刑の適用を論ずる裁判官をも誤解せしむることあり余會て鑑定人として法廷に招喚せられ處方録を材料として疾病を鑑定し得るや尋問せられたることあり、予は直ちに否と答へたり、判官曰く「然らば一日硝着三五の處方あり是れ赤痢の治療法と云ふを得ざるや」、答て曰く「全處方は赤痢にも應用することあるも敢て赤痢の特効藥に非ず凡て腸胃の疾病に應用し得る處方あり」と、判官又曰く「然らば爰に三十倍の石炭酸水五〇〇瓦の處方あり是れ單純の腸加答兒に必要ありや否や」、答へて曰く「必要なし」、判官傲然として曰く「然らば處方録に由て赤痢の如何を鑑定し得ざるものと云ふを得ず」とて尙ほ此處方録を材料として熱慮し是非共鑑定せんことを命ぜり、余は此不當なる命令には甚だ不満ありしと雖も法廷に

於ける判官の命令は徒らに之を拒絶すること能はず、且出來得る範圍にして足れる旨を附言せし故尙ほ熟慮して鑑定書を作れり

其鑑定書には先づ病症の診斷法を記し、疾病は其徵候を以て診斷し然も決して容易なるものに非ず況んや處方を以て其疾病を鑑定する可きは極めて無方なることを説き鑑定書に代ゆるに診斷學を教授したることあり

夫れ斯くの如く處方録が所謂處方録さなるが如きは唯其症狀に由て對症療法を行ふに過ぎざるものとす、其咳嗽は如何なる種類の呼吸機病に由て發したるやを知らず、食慾の缺損に由て胃病あることを知るも如何なる種類の胃病あるや又其源病は何れにあるやを知らず貧血あるを知るも其病源を研究せざる証なり

斯くの如き對症療法に満足することは極めて危険なるものあり治癒すべき疾病も死を招くべき恐れあり、速かに治癒すべき疾病も其治癒を遅からしむる憂あり斯くの如き醫者は實に僱醫數編と云はざるべからず此數醫と僱醫とさかり易き時期は第二期乃ち少しく實地に熟せんとする時期あり換言すれば不明の疾病あるも其病源を探究することを勉めず一定の方針をも定めずして徒らに對症療法に満足せんとする弊に由を生ずるものあり、故に不明の疾病に遭遇せば先づ二三の疑診を定め其症狀を明細に記入し豫め診斷に障害なき對症療法を行ひ已得の學理及實地上の知識若くは治療の結果を参照し着々其病名を定むることに勉めざるべからず然らざれば前例の如き僱醫數醫を以て終るべき恐れありとす、

二 療法、病的現象は徒らに攻撃するものに非ず

卒業後始めて實地に従事し患者を預かることとされれば兎角病的現象を攻撃したきものなり、患者も亦た其攻撃を切に希望して止まざるものとす、爰に一番新知識を應用し功名手柄を現はさんとするは人情あり、又醫者と

しての本務も此病敵攻撃しあるものとす
しかるに此病的現象は徒らに攻撃すべきものにあらず、何とされれば凡て

病的現象は必ずしも身体に害あるものに非ず、反つて患者に利益にして必要上現はるゝもの多し、其最も著明なる例を擧ぐれば咳嗽は有害物質を咯出するが爲めに發し、下痢も亦た有害分泌物若くは病毒排泄の目的に出づるものあり、今徒らに是等の症狀を攻撃して其現象を抑制せんことに勉め鎮咳劑若くは止痢藥を應用すれば有害分泌物は益々蓄積し病的現象へ愈々増劇するものとす、反つて其攻撃を止め更に之れを誘導し咳嗽あれば之れを催し下痢あれば下劑を投すれば其現象は自然に停止するものとす

之れを社會等に例ふれば交際場裏の掛引き全一にして喧嘩腰しては纏りの附かざるものあり、何事を協議するにも徒らに先方の弱点を攻撃すれば先方は益々昂奮するは人情あり、反つて平和に其利害を説けば修りの早きものあり、又小兒の涕泣を制せんが爲め之れを叱り付ければ益々劇しく泣き叫ぶものとす、反つて之れを慰め或は玩弄物若くは菓子杯を與ふれば自然に其涕泣は停止するものとす

病毒も亦た之れと全一にして之れを攻撃すれば益々昂奮し其現象を増劇せしめ靜かに之れを誘導すれば自然に平和に赴くものとす、就中解熱藥の濫用は大ひに慎まざるべからず、然るに熱病患者は其解熱を希望すること切なり、家族も亦た其解熱の如何に由て醫術の巧拙を評し甚しきに至りては解熱の如何に由て醫を轉せんとす、爰に解熱藥を投すれば一時愉快に解熱し大ひに名譽を博することあるも此解熱は一時的に過ぎず、其熱は直に再び上昇し且不正さかり益々診斷を困難ならしめ經過は爲めに短縮せざるのみならず反つて延長す殊に危険なるは遂に爲めに心臓麻痺を起すの恐あるものあり、之れに反して其熱を自然の經過に一任し唯其脈及呼吸等を監督して合併症を豫防すれば解熱を要せずして一定の經過を取り疾病は自然に治愈するものとす、蓋し此熱も亦た必要上現はるゝ現象にして反て患者の身体に利益あるものとす、何とされれば患者の血液は細菌の繁殖に適する温度を捨て其生存に堪えざる高温に變ずるものとす、故に熱は病毒に對す

一種の武器と云はざる可からず然れども高熱持續の爲め中樞神經系統に障害を發するや或は高熱ならざるも其持續長き爲め益々食慾を減じ愈々營養を障害し來らば一時解熱藥を試むるも可あり、然れども解熱藥の長き持續は遂に其効力を失ふ而已ならず反つて害あるものとす故に徒に其熱を攻撃するよりも其熱發の病源を探究し其病的機能の輕快に勉むれば熱は自然に下降するのとす、疼痛も亦た患者を苦むる症狀あり、此疼痛は麻酔藥の應用に由て愉快に停止す、しかれども其疾病は治癒したるものに非ず、殊に其疾病の診斷及び經過は其疼痛の程度に由て定まるものとす従つて此疼痛は麻酔上極めて必要な現象あり、故に麻酔藥は疼痛輕快に利あるも診斷及び經過の鑑定を妨ぐるものあることを記憶せざる可からず従つて診斷の決定せざる間は毒法の如き他の方法を以て疼痛の輕快に勉め猥りに麻酔藥を應用すべきものに非ず、之れども患者の苦悶を除くことは醫の仁術なるが故に疼痛甚しき場合には假令診斷決定せざるも一時麻酔藥を應用し徐ろに診斷を決すべし、

三 豫後は判然示さざるべからず

豫後を定むることは最も困難の業とす、然るに恰も此の豫後は患者の知らんと欲する最大の希望あり、此豫後の決定如何に由て患者は醫の知識を測定するものあり、凡て疾病の豫後は學理上一定し居ることは明かり、例へば重病中於にても肺炎腸扶斯の如きは正しく治癒し結核癌腫の如きは治癒せざること明かり之れども實地上に於ては肺炎腸窒扶斯の死亡するものあり、結核若くは癌腫と診斷せしものも雖も輕快することなきに非ず、大家と雖も豫後の爲めに失敗したる實例少からず、往診中豫后佳良と診斷したる患者が其大家の未だ患者を去らざる以前に患者の死亡したる例あり、斯くの如く豫後を定むることは醫師の甚だ苦しむ所なるが故に之れを曖昧に附せんとするもの多し、普通の用語として所謂餘病の發生如何を以てし徒らに其責任を免かれんとするもの多し、

豫後は判然患者に示さざる可からず、然らざれば患者の信用を得ること多し、此困難なる豫後を如何にして判然定め得るや、其法は各個人の知識を基礎として諸症狀を精密に參照し其豫后佳良に近きものと信するものは斷然之れを不良と定め其不良に近きものは判然これを不良と宣告すべし、然る上は萬一の失敗は覺悟せざるべからず、蓋し失敗は技術を磨く賜あり、醫者は患者を殺せば殺す程其技術は向上するものありと云ふ、實に金言なり、此の失敗に由て爾後の注意を増し益々失敗を少からしむべものあり、徒らに豫後を曖昧に附し猥りに失敗を免れんとすれば終生正確なる豫後を定むること能はず

爰に幸ふることは患者の信する豫後は必らずしも醫學上の豫後に一致するものに非ず、其の疾病の治癒にあらずして其症狀の輕快を意味すること多し、此症狀の輕快如何は絶對的の豫後を定むるよりも容易なり従つて検査を正確にし治療の方針を誤らざれば多數の疾病は假令全く治癒せざも輕快せしめ得るものとす、然るものとす、然る上は患者に豫後佳良を宣言する機會は甚しく増加すべし、

直接患者に豫後を示すことは注意せざるべからず、蓋し豫後の佳良あることを宣言することは大ひに治療上の利益ありと雖も豫後の不良ある癌腫結核の如きに至りては大ひに熟慮せざるべからず、一派の學者は直接患者に判然豫後を宣告するを實用す、是れ蓋し一方に於ては患者を安心立命せしめ又死後の始末に便ありと云ふ在り、之れども是れ甚だ危險あり、此宣告に由て輕快すべき疾病が頓に増悪すること少からず俗に病は氣から起ると云ふ、蓋し現今の社會には聖人君子少ふくして多くは小心翼々たる小人なく、豫後の不良あるを聞き安心立命して緩々死後を談すべき膽力あるもの稀あり故に豫後の不良あることを示すには直接患者に宣言せずして間接的に其家族に示し患者直接には反つて豫後の不良あることを斷言して大に安堵せしむることは又治療法必要な一法あり

何れにしても譲後を定むるには學理と實地の知識を参照し専心熟慮せざるべからず、場合に由ては一定の時日を借るも可なり、要するに以上三者を運用するには醫術に熱心ふらざるべからず、又研究の思想を有せざるべからず、徒らに社會を瞞着するが如きは醫術の本意に背くことは勿論予の所謂開業學の原則に違反するものなり、

* * * * *

會 告

●故小川教授銅像建設醴金芳名

(着金順ト額高ニヨリいろは順ニ列記セシモノ)
(ニシテ姓名ノ上〇ヲ附スルハ發起人ノ印ナリ)

イ、井ノ部

金拾五圓	○飯塚忠男	金拾圓	○猪木彦助
金六圓	○岩佐兵藏	金五圓	石橋四郎
金五圓	○生駒廣太郎	金參圓	飯島正之助
金參圓	石田伍佐	金貳圓	○石川喜直
金貳圓	井上隼雄	金貳圓	鴨脚光榮
金貳圓	岩崎勝治	金貳圓	稻坂清八
金貳圓	伊藤一	金貳圓	飯森益太郎
金貳圓	岩田一	金貳圓	今井外吉

金貳圓	岩津知造	金貳圓	池田秀雄
金貳圓	石坂直次郎	金壹圓五拾錢	井原悟
金壹圓五拾錢	今村文碩	金壹圓五拾錢	伊藤春馬
金壹圓	池田菱吉	金壹圓	池田廉一郎
金壹圓	井口正察	金壹圓	井村省吾
金壹圓	岩崎衷藏	金壹圓	伊藤禮二
金壹圓	猪飼善助	金壹圓	市川久多
金壹圓	石川齊	金壹圓	井上只次
金壹圓	井上松三郎	金壹圓	井本清吉
金壹圓	乾一夫	金壹圓	今井省三
金壹圓	市村塘		

ハ、ノ部

金貳拾圓	○八田智證	金五圓	○濱田玄達
金四圓	○波多野彌五郎	金參圓	原喜三郎
金參圓	○林篤	金貳圓	原貞次
金貳圓	橋爪元吉	金貳圓	原田悦五郎
金貳圓	濱田眞組	金貳圓	林豐次
金貳圓	羽根田鴻三郎	金貳圓	濱口廣海
金貳圓	羽根田信次	金貳圓	蓮村外男
金貳圓	○土師双他郎	金壹圓	林正雄
金壹圓	原田正廣	金壹圓	英軒二
金壹圓	花岡佐太郎	金壹圓	伴鐸也
金壹圓	長谷川愛之亮	金壹圓	速見昇
金壹圓	林可一	金壹圓	萩野茂次郎
金壹圓	橋本監次郎	金壹圓	春田久太郎

金壹圓 濱池藤太郎

金壹圓 長谷川 葛

金壹圓 橋本正次

金壹圓 林 竝木

二ノ部

金參圓 丹羽玄龍

金壹圓 西村順八

金壹圓 西村政吉

金壹圓 西正胤

金壹圓 西英盛

ホノ部

金拾圓 星野正齊

金參圓 細田 榮

金壹圓五拾錢 本田三郎

金壹圓 堀 米次郎

金壹圓 堀井勝二

トノ部

○土肥慶藏

金貳圓 遠田 清

金貳圓 戸田伊代治

金壹圓 富田敦貴

金壹圓 刀稱有恒

金壹圓 富田 寛

金壹圓 橋本喜久三

金壹圓 林 義輔

金壹圓 橋内兵次

金壹圓 林 常雄

○丹羽直

金貳圓 西尾岱抱

金壹圓 丹羽 幹

金壹圓 西田幾多郎

金參圓 堀 久太郎

金貳圓 堀田圭三

金壹圓 穂刈光平

金壹圓 星子元真

金貳圓 戸谷慈一

金貳圓 時國良作

金貳圓 富澤外次郎

金壹圓 富田 寛之

金壹圓 富澤圭太郎

チノ部

金參圓 ○千葉玄也

金壹圓 中條俊夫

又ノ部

金壹圓 額 又太郎

ヲノ部

金參拾圓 ○岡田剛吉

金五圓 小 川 丈

金五圓 ○小原芳雄

金參圓 ○大澤岳太郎

金參圓 ○大澤五月

金參圓 ○沖野彌一郎

金貳圓 奥野源治

金貳圓 小野林利一

金壹圓五拾錢 岡本三作

金壹圓 小倉嘉一郎

金壹圓 小野 醇吉

金壹圓 大國眞太郎

金壹圓 小黒仁太郎

金壹圓 小幡學雄

金壹圓 尾崎平吉

金壹圓 岡田甚英

金壹圓 大岸 鹿

金壹圓五拾錢 筑紫季雄

金壹圓 近森村主

金參拾圓 ○岡本京太郎

金五圓 ○岡島敬治

金五圓 ○岡本武次

金參圓 緒方正清

金參圓 太田美濃里

金貳圓 ○太田精一

金貳圓 太田他計作

金壹圓五拾錢 大口富治

金壹圓 岡田虎介

金壹圓 大原米次郎

金壹圓 尾倉一英

金壹圓 奥野周造

金壹圓 大橋 豊

金壹圓 小原徳太郎

金壹圓 岡 忍

金壹圓 尾崎芳壽

金壹圓 小田切 良太郎

力部

金拾圓 ○鷺山謙吉 金五圓 ○渡守貞
 金參圓 鷺山他三郎 金貳圓五拾錢 綿打つれ
 金貳圓 渡邊復介 金貳圓 渡邊九壽松
 金壹圓五拾錢 渡邊十治 金壹圓 若林全太郎
 金壹圓 若尾隆吉 金壹圓 若槻寛隆

力部

金六圓 ○河合忠次 金五圓 ○鹿江佐六
 金五圓 ○加藤清次 金五圓 ○金岡陸彦
 金五圓 ○勝木直吉 金五圓 ○金子治郎
 金參圓 ○河野徹志 金參圓 河崎有作
 金參圓 ○河野徹志 金貳圓 ○加門桂太郎
 金貳圓 ○加藤慶三 金貳圓 ○桂田富士郎
 金貳圓 ○神岡藤一郎 金貳圓 鎌田勤之助
 金貳圓 蒲生翼 金貳圓 韓清泉
 金壹圓 神坂勇治 金壹圓 神谷貞二郎
 金壹圓 春日健治 金壹圓 河合秀波
 金壹圓 金子正次 金壹圓 鎌尾萬明
 金壹圓 上坂政太郎 金壹圓 川崎巳三
 金壹圓 金子義長 金壹圓 加納景成
 金壹圓 片山真作 金壹圓 河野勇
 金壹圓 河村宗作 金壹圓 河合麟
 金壹圓 桂村定治 金壹圓 金原三郎
 金壹圓 梶川甚一 金壹圓 梶川藏重

目部

金壹圓 ○加藤靜雄 金壹圓 影山清美
 金壹圓 河合義文 金壹圓 河崎正雄
 金參圓 吉川孝作 金參圓 吉田幡誠
 金參圓 ○吉村寅太郎 金參圓 ○米村吉太郎
 金貳圓 吉川砥直 金壹圓五拾錢 吉村一馬
 金壹圓 吉見薰 金壹圓 吉田義一
 金壹圓 橫田彌吉 金壹圓 吉田繁治郎
 金壹圓 米田正二 金壹圓 吉見通義
 金壹圓 吉崎郡太郎 金壹圓 吉田東秀
 金壹圓 吉池省吾 金壹圓 吉村政行
 金壹圓 吉井康次郎

夕部

金拾貳圓 ○谷口長松 金拾圓 ○高安右人
 金五圓 高松多齋 金五圓 田中潮
 金五圓 ○田中增藏 金五圓 ○多田學三郎
 金五圓 ○高山尙平 金五圓 ○鷹見義郎
 金參圓 ○田中一次郎 金參圓 武田正壽
 金參圓 ○高山正雄 金參圓 竹多乙三郎
 金貳圓 ○田中正一 金貳圓 高橋常作
 金貳圓 高岡元節 金貳圓 高橋佐内
 金貳圓 高澤甚作 金貳圓 谷澤雅一
 金貳圓 竹田鑛次郎 金貳圓 田中健次
 金貳圓 武田久米藏 金貳圓 館保二

金貳圓	○田中正鐸	金壹圓五拾錢	橋三九	金拾圓	○中澤清八	金五圓	中島正一
金壹圓五拾錢	竹中繁次郎	金壹圓五拾錢	高木琢磨	金五圓	○永井靜雄	金參圓	中島誠
金壹圓	建部鈴二郎	金壹圓	高橋金一郎	金參圓	中橋次郎右衛門	金貳圓	中村欣一郎
金壹圓	寶島惣太郎	金壹圓	種子田秀吉	金貳圓	長井運男	金貳圓	永江直之
金壹圓	田村圓四郎	金壹圓	竹中傲	金貳圓	中野玄次	金貳圓	中川幸庵
金壹圓	田中義雄	金壹圓	高田文齋	金貳圓	永原松三郎	金壹圓五拾錢	中川喜平
金壹圓	高伊三郎	金壹圓	竹下麗三郎	金壹圓五拾錢	成田成治	金壹圓五拾錢	中須熊藏
金壹圓	高田範國	金壹圓	高木安治	金壹圓	中谷正範	金壹圓	永井德壽
金壹圓	高田一郎	金壹圓	高野宗重	金壹圓	長村吉太郎	金壹圓	永島金四郎
金壹圓	竹松備	金壹圓	玉森法靈	金壹圓	奈瓦八郎	金壹圓	永井人雄
金壹圓	高橋半也	金壹圓	高柳元六郎	金壹圓	長田八三郎	金壹圓	長澤安弘
金壹圓	館昇榮	金壹圓	高橋重三	金壹圓	永井環	金壹圓	長久開一郎
金壹圓	高松岩吉	金壹圓	高口保太郎	金壹圓	中西島吉	金壹圓	中西吉郎
金壹圓	高辻喜作	○金壹圓	○高山基重	金壹圓	中野嘉作	金壹圓	
金壹圓	田中基保	金壹圓	田中鉄吉				
ツ							
金參圓	月原秀範	金貳圓	塚原千津馬	金五圓	○村上庄太	金貳圓	諸橋嘉久次
金貳圓	都築熊藏	金貳圓	辻岡律	金貳圓	望月惇一	金貳圓	望月慶作
金貳圓	辻本辰之助	金貳圓	辻村耕夫	金壹圓	武曾三郎	金壹圓	村田龜太郎
金壹圓五拾錢	津田博明	金壹圓	津田信吉	金壹圓	村田太二郎	金壹圓	村本笹次郎
金壹圓	土屋重俊	金壹圓	津川恒	金壹圓	村尾純昌	金壹圓	村木維夫
金壹圓	辻一次	金壹圓	津川恒	金壹圓	村田金太郎	金壹圓	諸角友平
十							
金參拾圓	○中村顯	金拾五圓	○中島喜作	金拾圓	○上野貞吉	金五圓	○白井丈吉

金五圓 ○上田計二

金壹圓 上田茂

金壹圓 宇野正

金壹圓 內海友七

金壹圓 植木信親

金壹圓 上里良溫

金壹圓 浦井鎧一郎

工、工ノ部

金貳圓 江守武

金壹圓 江村正也

ノ部

金五圓 ○野田忠廣

金壹圓 野嶽利七

金壹圓 野村義雄

クノ部

金拾五圓 ○久保武

金五圓 ○吳秀三

金貳圓 ○熊谷省三

金壹圓五拾錢 ○草野佐一郎

金壹圓 久保田保治

金壹圓 桑折直

金壹圓 倉重吉次郎

金壹圓 久我龜

金貳圓 ウオルファト

金壹圓 上木隆基

金壹圓 牛塚榮太郎

金壹圓 瓜生尹重

金壹圓 上原秀三

金壹圓 內田理治

金壹圓 上原菊之助

金壹圓 江藤幹

金參圓 野口美之助

金壹圓 野村亮吉

金壹圓 野村敏

○草鹿丁 卯次郎

藏 尙太郎

久津水勝作

黒田眞岳

黒田道純

熊西中藏

來問隆次

窪美一久

金壹圓 桑原益方

ヤノ部

金拾圓 ○山田謙次

金八圓 ○山崎幹

金五圓 山形仲藝

金參圓 八牧政孝

金貳圓 山口辰五郎

金貳圓 ○山田岩次郎

金貳圓 屋富祖 徳次郎

金壹圓 山田幸吉

金壹圓 八里延

金壹圓 山崎太一

金壹圓 山口淳

金壹圓 山本幹雄

金壹圓 山田鹿

金壹圓 安田三水

金壹圓 八波則吉

マノ部

金五圓 ○松浦龜太郎

金貳圓 松田龜太郎

金貳圓 松田研吉

金貳圓 眞柄重一

金貳圓 松村魁

金貳圓 馬庭駿一郎

金壹圓 黒川由巳

矢田興之

○山田壽江子

○山田義忠

○山根文策

山口榮

山田兔毛

○山田孝太郎

山田金一郎

山下銀吾

柳原茂樹

山口敏雄

山田忠之

山崎芳太郎

山田外來雄

山本兵三郎

○松原三郎

政山龍雄

松浦啓三

松田善四郎

松山清

松王數男

金壹圓五拾錢 眞澤貞一 金壹圓
 金壹圓 丸山六郎 金壹圓
 金壹圓 松井源長 金壹圓
 金壹圓 眞柄佐一郎 金壹圓
 金壹圓 町原光滌 金壹圓
 金壹圓 松本 貢 金壹圓
 金壹圓 松井梅次郎 金壹圓

フノ部

金拾圓 ○藤岡勝治 金五圓
 金五圓 藤原敏夫 金參圓
 金參圓 ○藤井亥之吉 金貳圓
 金貳圓 古屋榮治 金貳圓
 金貳圓 藤井一雄 金壹圓
 金壹圓 藤源 謙 金壹圓
 金壹圓 福岡喜洋 金壹圓
 金壹圓 副田實成 金壹圓
 金壹圓 古山喜平 金壹圓
 金壹圓 不破才三郎

クノ部

金拾五圓 ○越野義三郎 金拾五圓
 金五圓 ○近藤次繁 金參圓
 金貳圓 ○上坂熊勝 金貳圓
 金貳圓 近藤 禮 金壹圓
 金壹圓 小出貞次郎 金壹圓

金壹圓 松本常次 金壹圓
 金壹圓 增井榮太郎 金壹圓
 金壹圓 松尾 等 金壹圓
 金壹圓 增田八郎 金壹圓
 金壹圓 松田 準 金壹圓
 金壹圓 馬淵眞澄 金壹圓

チノ部

金貳圓 ○藤根常吉 金壹圓
 金壹圓 ○深美貞之助 金壹圓
 金壹圓 古川市次郎 金壹圓
 金壹圓 藤田藤右衛門 金壹圓
 金壹圓 古屋興三 金壹圓
 金壹圓 深澤治三郎 金壹圓
 金壹圓 藤井最正 金壹圓
 金壹圓 藤井榮四郎 金壹圓
 金壹圓 藤井助雄

リノ部

金拾圓 ○秋元隆次郎 金拾圓
 金八圓 ○秋山八百藏 金五圓
 金參圓 青木正枝 金參圓
 金參圓 ○阿部莊二 金貳圓
 金壹圓 赤倉喜久雄 金壹圓
 金壹圓 安積 鼎 金壹圓
 金壹圓 朝日 昊 金壹圓
 金壹圓 阿部懸治郎 金壹圓
 金壹圓 赤祖父龍太郎 金壹圓
 金壹圓 足立 諒 金壹圓
 金壹圓 赤祖父廉三 金壹圓

サノ部

○足立健三郎 金壹圓
 ○吾妻勝剛 金壹圓
 朝山豊太郎 金壹圓
 芦澤孝治 金壹圓
 芦澤 照 金壹圓
 赤松 省 金壹圓
 赤尾肇三 金壹圓
 淺田耕造 金壹圓
 東喜平 金壹圓
 天野長重 金壹圓
 青木市次郎 金壹圓

金拾圓	○櫻井小平太	金拾圓	○佐々木達
金七圓	○酒井利勝	金五圓	○楠順次郎
金參圓	○佐竹清吉	金貳圓	坂井茂
金貳圓	○齋藤房治	金貳圓	佐崎伊久
金貳圓	○佐野爲明	金壹圓五拾錢	佐々木辰實
金壹圓	佐伯亮齋	金壹圓	佐藤松介
金壹圓	酒井政吉	金壹圓	佐野晃三郎
金壹圓	佐々木靜	金壹圓	崎遠郎
金壹圓	才田清一	金壹圓	佐々木九郎平
金壹圓	榑原久	金壹圓	佐藤元周
金壹圓	佐伯有吉	金壹圓	佐野幹雄
金壹圓	坂本信一	金壹圓	澤田辰造
金壹圓	澤田冬	金壹圓	齋藤義雄
金壹圓	澤田定信	金壹圓	征岡芳名
金壹圓	澤賢吉	金壹圓	佐口榮

二、部

寺、部

金貳圓	湯目隆績	金貳圓	○水野直
金拾圓	○水野直	金八圓	○宮田篤郎
金五圓	○三輪信太郎	金參圓	○三木三郎
金貳圓	三輪田眞佐子	金貳圓	三股梅吉
金貳圓	三輪德寬	金貳圓	宮井勇
金貳圓	宮入慶之助	金壹圓	南茂吉
金壹圓	水口順	金壹圓	宮越常次郎
金壹圓	三輪俊雄	金壹圓	水上俊三
金壹圓	三竹欽五郎		

三、部

シ、部

ヒ、部

金五圓	○下平用彩	金五圓	○島田吉三郎
金五圓	篠崎都香佐	金參圓	○清水奎平
金貳圓	敷波重治郎	金貳圓	○神保正長
金貳圓	柴周平	金貳圓	七五三龜吉
金壹圓	清水衛	金壹圓	茂野政治
金壹圓	庄田喜太郎	金壹圓	清水秀夫
金壹圓	柴田庄藏	金壹圓	城石健二
金壹圓	下條正夫	金壹圓	新谷成三郎
金壹圓	庄司正義	金壹圓	鳥村伊之助
金參圓	平田一若	金參圓	廣江嘉平
金貳圓	○弘田長	金貳圓	○久田督

第十卷雜誌第五十八號

金壹圓五拾錢 彦坂誠一 金壹圓 廣多永太郎
 金壹圓 飛見丈俊

毛ノ部

金五圓 ○森田齊次 金五圓 ○森島彦夫
 金壹圓五拾錢 森川修 金壹圓 森岡市太郎
 金壹圓 森正英 金壹圓 森舜司

七ノ部

金五圓 ○關格之助 金參圓 關啓治郎
 金參圓 關根平 金壹圓 千秋了

又ノ部

金五圓 ○鈴木文太郎 金五圓 ○鈴木徳男
 金五圓 ○鈴木重吉 金五圓 ○鈴木寛之助
 金參圓 ○駿河尙庸 金貳圓 菅之芳
 金貳圓 ○杉村廉 金貳圓 杉部多米吉
 金貳圓 スタイ子ル 金壹圓 鈴木幸平
 金壹圓 杉田治十郎 金壹圓 末岡外次郎
 金壹圓 鈴木實 金壹圓 杉本恒治
 金壹圓 須貝猪次 金壹圓 鈴木俊定
 金壹圓 鈴木茂 金壹圓 砂田圭

団体合名ノ部

金參拾五圓拾錢

金澤醫學專門學校四十一年度四年級百拾七名總代 近藤清吾

金參拾貳圓拾錢

金澤醫學專門學校四十一年度三年級百七名總代 鈴木英男

金貳拾四圓

全 二年級八拾名總代 小泉興四郎

金貳拾四圓五拾錢

全 一年級百貳拾壹名總代高橋邦三郎

金拾貳圓

看護婦及產婆 丹上皆外貳拾貳名

金拾圓

大日本私立衛生會石川縣支會

金九圓

日本赤十字社石川支部

金六圓五拾錢

第九師團見習醫官伊藤哲一外拾七名

金五圓

金澤醫學專門學校四十一年度副手月岡勝治外拾貳名

金貳圓五拾錢

篤志看護婦會石川支會

金貳圓

金澤醫學專門學校教務生徳庶務會計各課川島俊外七名

金壹圓

兵庫縣神戸病院 岩井尊宗外貳名

金壹圓

東京下谷區東坂町六二小松方 安田たつ外一名

金壹圓

石川縣金澤病院管理部長一同

收支決算報告

一金千六百參拾八圓九拾九錢也 收入高

內譯

金千五百七拾四圓七拾錢 寄附金

金六拾四圓貳拾九錢 預金利子

一金千五百四拾八圓九拾七錢也 支出高

內譯

金六百五拾參圓五拾錢

金拾參圓

金六拾四圓五拾錢

金貳拾圓

金四拾六圓四拾九錢

金五拾壹圓四拾八錢

金七百圓也

一差引殘額九拾圓貳錢也
右之通ニ候也

明治四十三年四月十六日

總代 佐々木 達印

○自明治四十三年二月八日
至全 四月廿六日 校外十全會費納付調書

金額	期	限	氏	名
金參圓	自四十一年度	三ヶ年分	長	井 運 男君
金參圓	自四十三年度	三ヶ年分	高	崎 二 郎君
金參圓	自三十九年度	三ヶ年分	山	田 金 一 郎君
金參圓	全		石	倉 宗 嗣君
金壹圓	四十三年度分		岡	田 虎 介君
金六圓	自三十六年度	六ヶ年分	八	牧 政 孝君
金參圓	自四十一年度	三ヶ年分	中	本 和 三 郎君
金參圓	自四十二年度	三ヶ年分	松	井 宣 正君
金五圓	自三十四年度	五ヶ年分		
金五圓	自三十七年度	五ヶ年分		

銅像、臺石、石櫓及据
附費

銅像背後樹木代
引延寫真大額三面及
銅像寫真攝影代

謝 禮

通信費用

報告書及右郵稅

遺子奨學資金トシテ
小川家へ贈呈
右除幕式準備金トシ
テ更ニ預金

金五圓	全	大	塚 正 一君
金壹圓	四十一年度分	村	尾 純 昌君
金參圓	自四十二年度	三	野 泰 二君
金壹圓	至四十四年度	林	篤 篤君
金壹圓	四十一年度	中	村 弘 齊君
金五圓	自四十二年度	水	上 俊 三君
金壹圓	至四十八年度	大	屋 保 次君
金五圓	四十一年度分	羽	田 公 太 郎君
金參圓	自三十七年度	小	西 俊 三君
金五圓	至四十一年度	片	岡 正君
金參圓	自三十九年度	平	松 敏 四 郎君
金參圓	至四十一年度	伊	藤 二 郎君
金參圓	自四十二年度	大	住 惠君
金參圓	至四十四年度	綾	部 讓君
金貳圓	自四十一年度	宮	越 常 次 郎君
金參圓	至四十八年度	藤	田 藤 右 衛 門 君
金參圓	自四十三年度	吉	田 幡 誠君
金參圓	至四十七年度	波	孚 貞君
金五圓	自三十九年度	高	伊 三 郎君
金貳圓	至四十一年度	長	田 八 三 郎君
金參圓	自四十二年度		
金參圓	至四十四年度		

次號雜誌發刊 六月二十五日

次號原稿之切 五月二十五日